長岡京市文化財調査報告書

第41冊

2000

長岡京市教育委員会

編集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

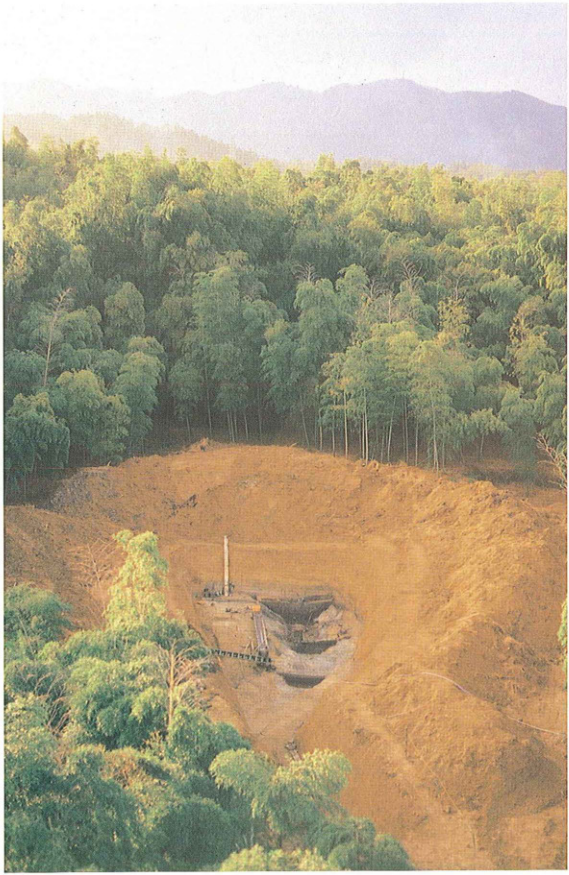
長岡京市文化財調査報告書

第41冊

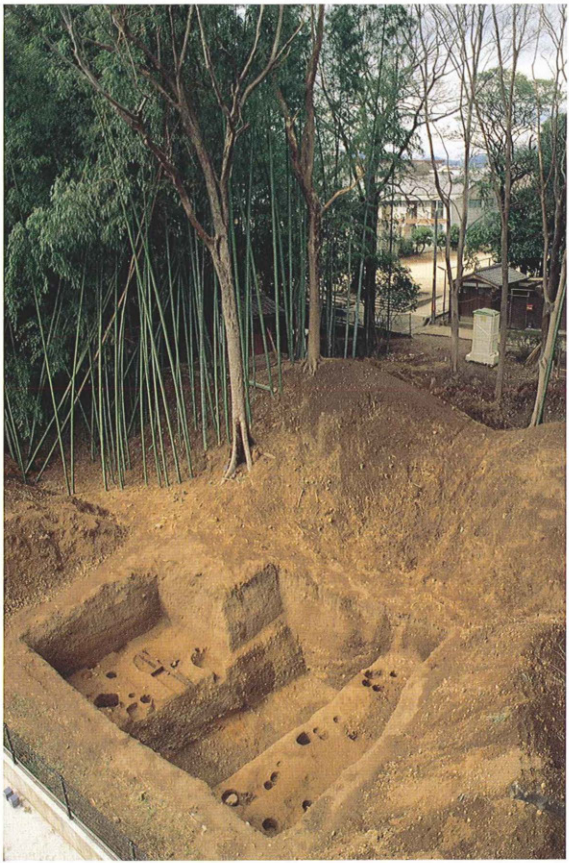
2000

長岡京市教育委員会

編集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



溝 SD09遠景（東から）



神足城の堀と勝龍寺城の土塁（南東から）

調査地より乙訓寺を望む（北東から）

序　　文

本市の埋蔵文化財は、旧石器時代から現代まで、３万年以上もとぎれることなく続いてきた人々の営みが大地に刻み込まれたものです。

その歴史の中で、多くの古墳群、また、まぼろしの都と言われた長岡京の都跡、勝龍寺城を初めとする館跡など、過去と現代の延長線上に未来を引き継ぐべき遺産が数多く残されています。

埋蔵文化財をはじめ、様々な遺産を守り育み活用することで、より豊かな輝きのある長岡京市が創世されるものと考えます。

本書は国庫補助事業として実施したもので、長岡京市天神五丁目の今里大塚古墳、井ノ内車塚古墳、今里四丁目の個人住宅、友岡西山の個人住宅の発掘調査成果などをまとめたものです。

今回の発掘調査で、今里大塚古墳は墳丘の作り方、井ノ内車塚古墳は時期と全長が明らかになりました。

また、今里四丁目からは奈良時代の乙訓郡の役所跡と思われる柱跡が発掘されました。さらに、友岡西山は、長岡京跡や友岡遺跡の範囲を確認する調査であります。

この様な新しい発見を市民の皆様にお知らせし、将来にわたって広くご活用いただけるよう記録、保存することが当教育委員会の責務であります。

最後になりましたが、本報告書発行につきまして、文化財調査と保護に深いご理解とご協力をいただきました関係者、関係各機関、並びに調査地の近隣に在住される皆様に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成１２年３月

長岡京市教育委員会

教育長　小西誠一

凡　　例

1．本書は、長岡京市教育委員会が平成11年度に国庫補助事業として実施した調査概要報告である。

2．長岡京跡の調査次数は、左京域、右京域ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』の旧字名をもとにした地区割りに従った。

3．長岡京跡の条坊復原は、山中章「古代条坊制論『考古学研究』第38巻第４号（1992年）の復原案に従った。

4．本書に使用する地形分類については、とくに断らない限り「長岡京市地形分類図」『長岡京市史資料編一』（1991年）に従った。

5．長岡京跡の調査で使用している遺構番号は調査次数＋遺構番号であるが、報告により調査次数を省略している場合がある。

6．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

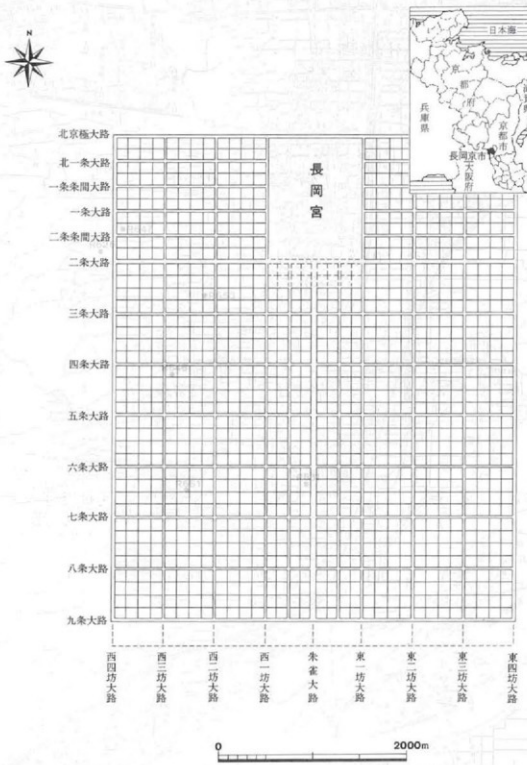
7．各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。

8．本書の編集は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが行った。

9．現地調査および本書の作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。また、遺物写真の撮影は西大寺フォト　杉本和樹氏のご協力を得た。

付表１　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京第626次	7ANGKM－１	長岡京市井ノ内鍛山７番地他	1998年12月７日〜1999年２月３日	580㎡	西四坊大路推定地
長岡京跡右京第631次	7ANMKI－６	長岡京市東神足二丁目７	1999年２月１日〜1999年３月12日	84㎡	神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡
長岡京跡右京第646次	7ANIOK－３	長岡京市天神五丁目108	1999年７月５日〜1999年８月17日	51㎡	今里大塚古墳
長岡京跡右京第647次	7ANGMB－１	長岡京市井ノ内向井芝４	1999年７月19日〜1999年８月17日	35㎡	井ノ内車塚古墳
長岡京跡右京第653次	7ANIAE－12	長岡京市今里四丁目210	1999年10月４日〜1999年11月26日	309㎡	今里遺跡
長岡京跡右京第661次	7ANNNM－２	長岡京市友岡西山14-7	2000年１月６日〜2000年１月25日	99㎡	友岡遺跡



第1図　本書報告調査地位置図（1/40000）

本 文 目 次

第1章　長岡京跡右京第626次調査概要 …… 1
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第2章　長岡京跡右京第631次調査概要 ……17
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第3章　今里大塚古墳第3次・長岡京跡右京第646次調査概要 ……27
1　はじめに　2　調査経過　3　墳丘の状況　4　出土遺物
5　まとめ

第4章　井ノ内車塚古墳第3次・長岡京跡右京第647次調査概要 ……37
1　はじめに　2　調査経過　3　墳丘の調査　4　出土遺物
5　まとめ

第5章　長岡京跡右京第653次調査概要 ……49
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第6章　長岡京跡右京第661次調査概要 ……63
1　はじめに　2　調査概要

図 版 目 次

巻頭図版　1　溝ＳＤ09遠景（東から）
巻頭図版　2　神足城の堀と勝龍寺城の土塁（南東から）
巻頭図版　3　調査地より乙訓寺を望む（北東から）

長岡京跡右京第626次調査

図版１（１）　調査区東半部（東から）
（２）　１トレンチ（東から）
（３）　２トレンチ（北から）
図版２（１）　３トレンチ拡張前（東から）
（２）　４トレンチ北壁（南から）
（３）　５トレンチ西壁（東から）
図版３（１）　溝ＳＤ09検出状況（西から）
（２）　溝ＳＤ09完掘状況（西から）
（３）　１トレンチ拡張区（南から）
（４）　溝ＳＤ09遺物出土状況
（５）　溝ＳＤ05・06の竹（南から）
図版４（１）　長岡京期の土師器・土製品
（２）　飛鳥時代の須恵器
図版５　花粉の顕微鏡写真

長岡京跡右京第631次調査

図版６　勝龍寺城の土塁（南東から）
図版７（１）　１トレンチ全景（東から）
（２）　１トレンチ堀ＳＤ01断面（南から）
図版８（１）　土塁と空堀跡（北東から）
（２）　２トレンチ空堀（西から）
（３）　２トレンチ空堀（北から）
図版９　土師器・陶器
図版10　土師器・瓦器・陶器・輸入磁器
図版11（１）　石器・石製品・金属製品・瓦
（２）　狐の土製品

今里大塚古墳第３次調査

図版12（１）　墳丘全景－１（東から）
（２）　墳丘全景－２（南西から）
図版13（１）　墳丘北トレンチ全景（北から）
（２）　墳頂部付近の盛土（西から）
（３）　トレンチ中央部の盛土（西から）
図版14（１）　墳丘西トレンチ全景（西から）
（２）　墳丘西トレンチ（西から）
（３）　トレンチ中央部水平面（北から）

井ノ内車塚古墳第３次調査

図版15（１）　後円部北トレンチ全景（北から）
（２）　後円部北トレンチ全景（北から）
図版16（１）　前方部南トレンチ全景（南から）
（２）　前方部溝部土層断面（西から）
（３）　須恵器出土状況
図版17（１）　後円部撹乱部調査区（南から）
（２）　前方部撹乱部調査区（西から）
図版18（１）　後円部撹乱部調査区土嚢状遺構
（２）　後円部撹乱部調査区土嚢状遺構
（３）　前方部撹乱部調査区北東隅
（４）　前方部撹乱部調査区南東部
（５）　出土遺物

長岡京跡右京第653次調査

図版19（１）　調査地全景－１（北から）
（２）　調査地全景－２（南から）
図版20（１）　調査地全景－３（南東から）
（２）　土壙墓ＳＸ09（南西から）
図版21（１）　掘立柱建物ＳＢ07（北西から）
（２）　掘立柱建物ＳＢ07柱穴（１－Ｐ４、２－Ｐ５、３－Ｐ７、４－Ｐ８）
図版22（１）　竪穴住居（南東から）
（２）　貯蔵穴ＳＫ31・32（東から）
（３）　土層堆積状況（東から）

図版23（1）　竪穴住居ＳＨ23、貯蔵穴ＳＫ31出土遺物
（2）　出土遺物
図版24（1）　掘立柱建物ＳＢ07出土遺物
（2）　土壙墓ＳＸ09出土遺物

挿図目次

第１図　本書報告調査地位置図（1/40000）……iii

長岡京跡右京第626次調査

第２図　発掘調査地位置図（1/5000）……1
第３図　調査地全体図（1/500）……3
第４図　１トレンチ・３トレンチ土層図（1/80）……5
第５図　１トレンチ拡張区実測図（1/150）……7
第６図　４・５・６トレンチ土層図（1/100）……7
第７図　近世以後の遺構（1/200）……8
第８図　長岡京期の遺構（1/200）……8
第９図　溝ＳＤ09土層図（1/40）……9
第10図　出土遺物実測図（1/4）……10

長岡京跡右京第631次調査

第11図　発掘調査地位置図（1/5000）……17
第12図　調査地周辺地形図（1/1000）……18
第13図　勝龍寺城の土塁・空堀と調査区（1/200）……19
第14図　１トレンチ検出遺構図（1/100）……20
第15図　１トレンチ溝ＳＤ01北壁土層図（1/80）……20
第16図　１トレンチ南壁土層図（1/80）……21
第17図　２トレンチ空堀実測図（1/100）……22
第18図　２トレンチ空堀東壁土層図（1/80）……22
第19図　１トレンチ出土遺物実測図－１（1/4）……23
第20図　１トレンチ出土遺物実測図－２（1/4）……23
第21図　１トレンチ出土遺物実測図－３（1/4）……24
第22図　２トレンチ出土遺物実測図－１（1/4）……25
第23図　その他の出土遺物実測図（1/2）……25

今里大塚古墳第３次調査

第24図　今里大塚古墳の位置（1/20000）……27
第25図　トレンチ配置図（1/800）……28
第26図　墳丘北トレンチ平面図・東壁土層断面図（1/60）……31
第27図　墳丘西トレンチ平面図・南壁土層断面図（1/60）……33
第28図　出土遺物（1/4）……35

井ノ内車塚古墳第３次調査

第29図　井ノ内車塚古墳の位置（1/20000）……37
第30図　墳丘測量図（1/250）……39
第31図　トレンチ配置図……40
第32図　後円部北トレンチ平面図・土層断面図（1/50）……41
第33図　前方部南トレンチ平面図・土層断面図（1/50）……42
第34図　後円部撹乱部調査区土層図（1/50）……43
第35図　前方部撹乱部調査区平面図……44
第36図　前方部撹乱部調査区土層図（1/50）……45
第37図　埴輪（1/4）……46
第38図　須恵器（1/3）……47
第39図　墳丘復原図……48

長岡京跡右京第653次調査

第40図　発掘調査地位置図（1/5000）……49
第41図　調査地土層図（1/100）……50
第42図　検出遺構図（1/200）……51
第43図　土壙墓ＳＸ09・10実測図（1/30）……52
第44図　掘立柱建物ＳＢ07実測図（1/150）……53
第45図　土坑ＳＫ03・05実測図（1/50）……53
第46図　竪穴住居ＳＨ23実測図（1/40）……54
第47図　貯蔵穴ＳＫ31・32実測図（1/20）……55
第48図　竪穴住居ＳＨ23、貯蔵穴ＳＫ31出土遺物実測図（1/2・1/4）……56
第49図　掘立柱建物ＳＢ07出土遺物実測図（1/4）……58
第50図　その他の遺構出土遺物実測図（1/4）……58
第51図　土壙墓ＳＸ09出土遺物実測図（1/2・1/4）……58
第52図　包含層出土遺物実測図（1/2・1/4）……60

第53図　盛土出土遺物実測図（1/2・1/4）……60
第54図　周辺地域の地形区分と奈良時代の遺構検出状況（1/5000）……61

長岡京跡右京第661次調査

第55図　発掘調査地位置図（1/5000）……63
第56図　調査前の状況（西から）……64
第57図　調査風景（東から）……64

付　表　目　次

付表1　本書報告調査一覧表……ii
付表2　長岡京跡右京第626次調査における花粉分析結果……15
付表3　長岡京跡右京第626次調査ＳＤ09（Ａ－Ａ′ライン）における主要花粉ダイアグラム…16
付表4　報告書抄録……65

第１章　長岡京跡右京第626次(7ANGKM-1地区)調査概要

― 長岡京跡右京二条四坊十三町、西四坊大路推定地 ―

１　はじめに

1　本報告は、1998年12月７日から1999年２月３日まで、長岡京市井ノ内鏡山７他において実施した長岡京跡右京二条四坊十三町、西四坊大路推定地の発掘調査に関するものである。調査面積は580㎡である。

2　本調査は、大規模開発計画に先立つ試掘調査として実施したものである。開発予定地は、長岡京跡の西限を画する西四坊大路推定地に隣接するほか、周辺には北平尾古墳群や回向場遺跡などがある。

3　調査は、平成10年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センターの原　秀樹が担当した。

4　調査の実施に当たり、土地所有者をはじめとする関係者の方々には種々のご協力とご理解を賜った。

5　本報告の花粉分析については、㈱古環境研究所に依頼した。その他の執筆および編集は原が行った。

第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

2　調査経過

調査地は、西山浄土宗総本山光明寺の北側に位置する。付近一帯は、北西から南東方向へ傾斜する標高50～100m前後の大阪層群からなる丘陵地となっており、現在は孟宗竹の竹藪である。調査対象地は、東西に最大140m、南北に最大60mあり、敷地総面積は約5000㎡である。

周辺では、竹藪の開墾作業中に古墳や骨蔵器が偶然に発見されている。7世紀前半代の築造と考えられる陶棺を埋葬した北平尾古墳[註1]のほか、近年では当地から北西600m離れた標高約95m前後の丘陵尾根筋付近から奈良時代の骨蔵器[2]が見つかっている。また、鎌倉時代の骨蔵器[3]と考えられる常滑産の壺と土師器皿も見つかっており、西山丘陵は古代から中世にかけて葬送の場であったことがわかる。主として明治時代以後、タケノコ栽培のため山林が竹藪へ変わるなか、偶然に掘り出された土器は数多かったものと思われる。一方、長岡京条坊復原によると長岡京の西辺を限る西四坊大路が調査地の西端付近に求められる。これまで西四坊大路は確認されていないが、想定される路面は地形的に起伏の多い山側を通ることから、地形条件によっては確認できない場合も考えられる。本地点は、丘陵内を東西に長いトレンチを設定することから、京域を限る道路や側溝の有無、長岡京期における土地利用についても明らかにされることが期待された。

3　検出遺構

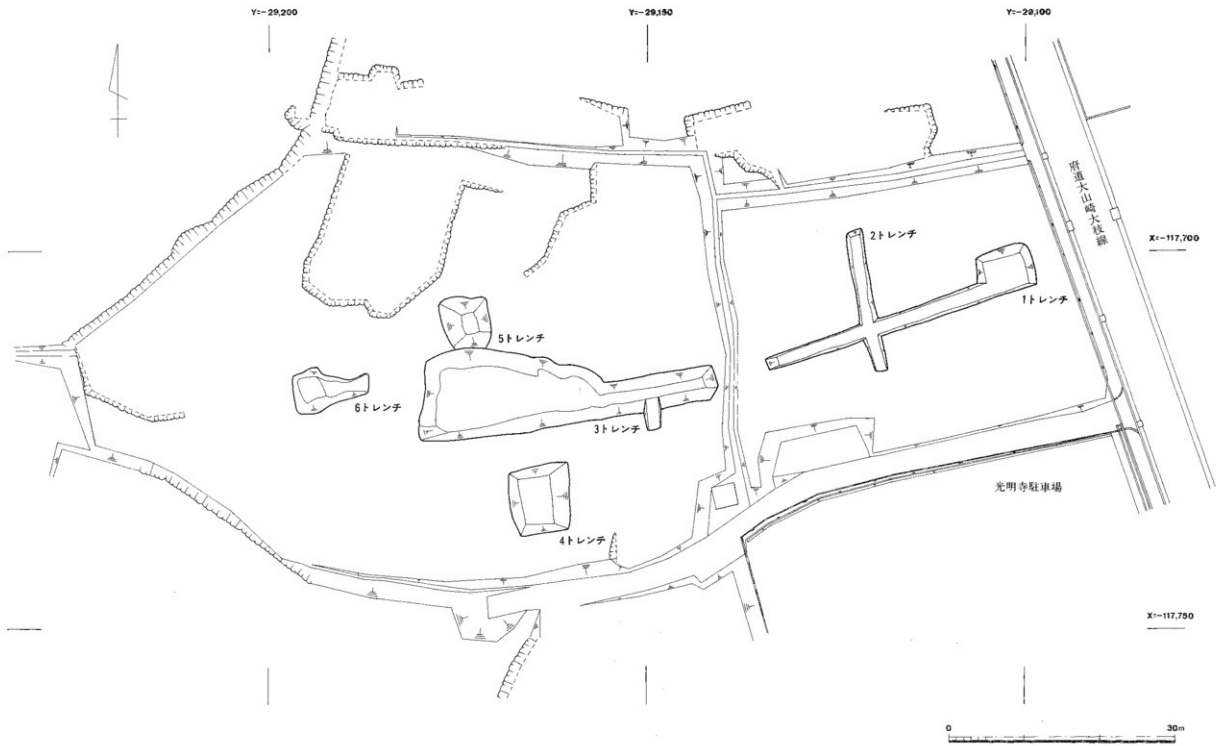
調査地は、全域が竹藪となっており、南北方向の地境溝で東西に二分されている。東側は府道大枝大山崎線に面し、南側は農業用道路をはさんで光明寺参拝者駐車場となっている。北側は地境溝が巡っており、西側は土取りによる崖面となっている。調査地は徐々に西から東へ低くなっており、現地表面の標高差は約8mある。調査は竹の伐採から始めた。試掘は、地境溝の東側に東西方向の1トレンチとT字形につながる南北方向の2トレンチを、西側に東西方向の3トレンチとその周囲に4・5・6の小さな方形トレンチを設定した。なお、試掘で遺構が確認された1トレンチ東端と3トレンチについては拡張を行った。

［1トレンチの調査］　幅2m、長さ37m。基本的な層位は、竹の根が張る客土層と腐植化して黒く着色された旧地表土の下は、東から西へ徐々に層厚が薄くなる明黄褐色～黄灰色を呈する層となる。これらの層は、厚さ20cm前後のほとんど平たんな堆積層で、小さな礫を含むほかは目立った斑紋や含有物はない。土質は、かなり緻密で粘質。第4・5層は埋土から現代溝と考えられたが、東端のピットと思われる掘形については遺構と判断して拡張を行った(第5図)。また、第11層についても断面の形状と埋土の色調から遺構の可能性も考えられる。遺物は、竹藪客土から軒桟瓦、菊花文の染付筒形茶碗、第6層から古墳時代後期の須恵器甕片が出土した。

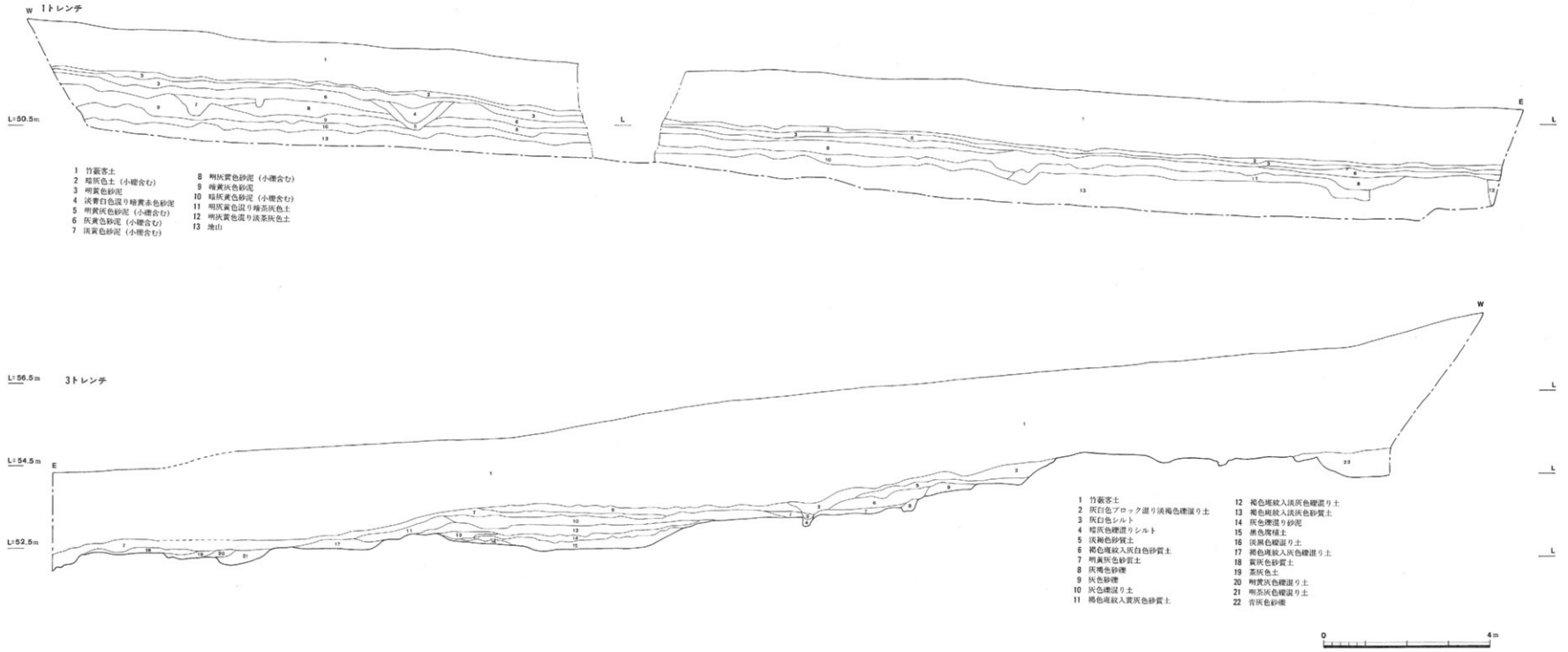
溝 SD01　幅0.4m前後の蛇行した溝。深さ0.1m未満。埋土に砂を多く含むことから水が流れていたと考えられる。遺物は出土していない。

土坑 SK02　不整形な形をした浅い土坑。深さ0.2m前後。遺物は出土していない。

土坑 SK03　拡張前にピットとしていたものは、長円形土坑の一部と判明する。幅1.2m、深



第３図　調査地全体図（1/500）

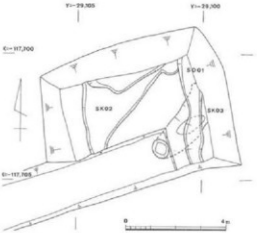


第4図　1トレンチ・3トレンチ土層図（1/80）

さ約0.5m。礫面が残るサヌカイト片が出土した。

［２トレンチの調査］　１トレンチと直交して北へ延びており、基本的な層位は変わらない。幅２m、長さ13m。旧表土下から古墳時代の土師器と須恵器の小片が出土した。

［３トレンチの調査］　西側の調査区は、土取りによる崖面が所々に残っており、土質ももろく崩れやすい土質である。３トレンチは、幅５m、長さ40mのトレンチを設定した。調査では、盛土を除去した段階で幅1.5m分しか確保できなかったが、その半分を掘り下げたところから溝と考えられる遺構が確認され、中から古墳時代の須恵器片と木片が出土した（図版２(１)）。溝の拡張は、４～６トレンチの調査が終了した後に埋め戻して行うこととなった。拡張後の検出遺構については別項で述べる。



第５図　１トレンチ拡張区実測図（1/150）

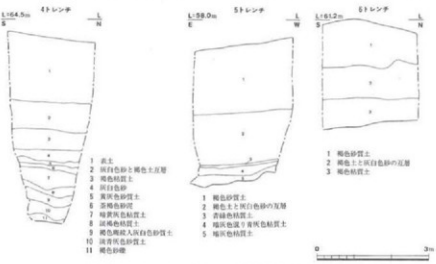
［４トレンチの調査］　８×９mの調査区。地表から底面の砂礫層まで約５mある（第６図）。第１層は表土、第２層は約５cm幅で交互に盛られた土入れ層である。以下、小礫を含む砂と粘質土が交互に堆積する。遺構と遺物は確認できず、地山面はさらに深いと思われる（図版２(２)）。

［５トレンチの調査］　６×７mの調査区。地表から地山面まで約3.5mある（第６図）。第１層は表土、第２層は交互に盛られた竹薮の土入れ層が堆積する。第３～５層の青灰色～暗灰色の粘質土には、生木に近い木枝が多量に捨てられていた。限られた部分調査のため断定できないが、西から東へ落ち込む状況は池か溝になる可能性がある（図版２(３)）。

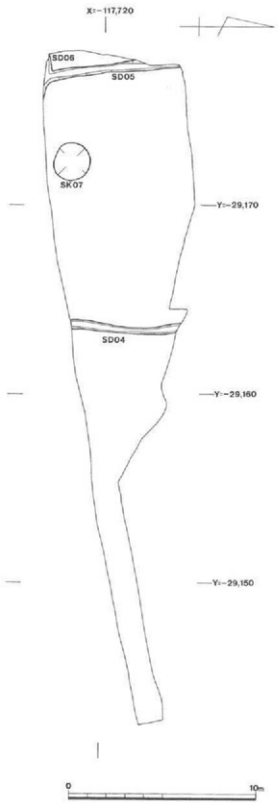
［６トレンチの調査］　５×５mの調査区東側にスロープをつける。地表から地山面まで約2.5mある（第６図）。第１層は表土、第２層は交互に盛られた竹薮の土入れ層が堆積する。

３トレンチ拡張後の調査

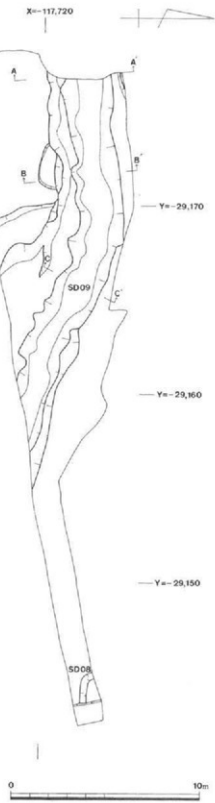
４～６トレンチの調査終了後に、当初確認された溝の全容を明らかにすることを目的に拡張を



第６図　４・５・６トレンチ土層図（1/100）

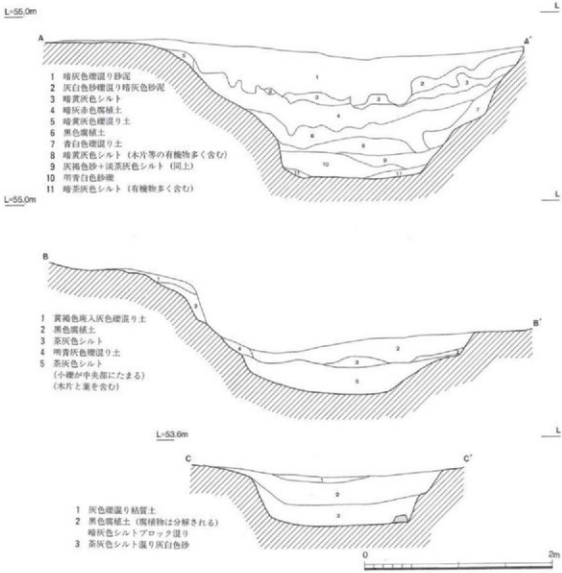


第7図　近世以後の遺構（1/200）



第8図　長岡京期の遺構（1/200）

行った。主な検出遺構は、近代以後と考えられる溝 SD04〜06、漆喰槽 SK07（第7図）、長岡京期の溝 SD09と時期不明の溝 SD08がある（第8図）。なお、本トレンチは、地形に沿って西から東へ下る傾斜地となっており、その中でも特に傾斜が急となる溝 SD04と漆喰槽 SK07の間は2



第9図　溝SD09土層図（1/40）

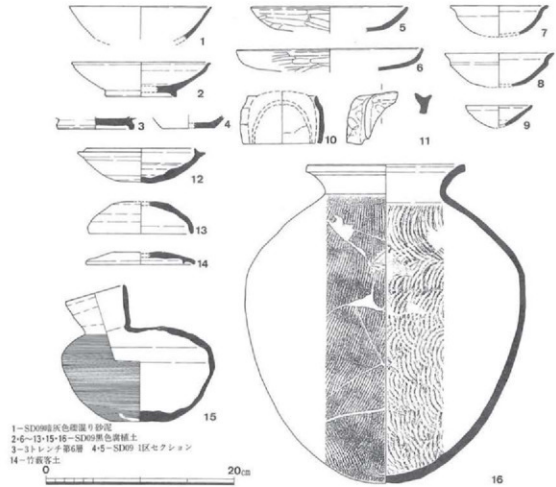
箇所で斜面を掘削して緩やかなこう配と小さな平たん面に改変している（第4図）。

溝SD04～06　南北方向のSD04・05は、幅約0.5m、深さ約0.3～0.4m。SD05と06は、溝内に竹を入れた暗渠溝である。SD04から竹はでていないが、これらの溝は当地の湿った土壌の湿気抜きのために掘られた溝と思われる。

漆喰槽SK07　底と側面を漆喰で固めている。農業用の水溜めか肥だめと思われる。

溝SD08　トレンチ南端でL字形に曲がる溝。幅0.2m、深さ約0.1m。遺物は出土していない。

溝SD09　西から延びて南東方向へ曲がる。溝は、断面B－B′ライン付近で南肩と同様の立ち上がる壁面が確認できないことから、北側も南と同じく斜面地を掘削してこう配の緩い傾斜面に改変した可能性がある。そのため、溝の規模は丘陵地の高まりを掘削した西端では深さ1.3m、幅4m余りあるが、浅くなる東側では深さ0.6m、幅2.5m前後と縮小している。底はほぼ平らで、底面の比高は約0.6mある。黄褐色系の地山面と、黒色腐植土の堆積は明暗の差が鮮やかである（図版3（1））。溝底には砂と礫が堆積し、その上に多量の木片と落葉、種子などを含む腐植土



第10図　出土遺物実測図（1/4）

層がある。黒色腐植土層は層厚約0.4m。木片と落葉、種子など形がわかる有機物は断面B－B′ライン以西に堆積する。西壁A－A′ラインから試料を採取し花粉分析を依頼した。

3　出土遺物

出土した遺物は、サヌカイト片、古墳時代の土師器と須恵器、長岡京期の土師器と須恵器、土製品、平安時代の須恵器と緑釉陶器のほか、中世の瓦器、白磁、近世の陶磁器、軒桟瓦などがある。1は、白磁碗の口縁部片。12世紀代に比定される碗Ⅸ類。2は、須恵器皿。3は、須恵器椀。いずれも削り出し高台で、内面を部分的にヘラミガキする。4は、全面に摩滅している。緑釉陶器の小型の壺か瓶ではないかと考えられる。軟陶。2～4は平安時代前期。5・6は、土師器皿A。外面全面をヘラケズリ後に、口縁部を横ナデする。7・8は、土師器壺C。いわゆる墨書の認められない人面土器タイプの小型品。9は、ミニチュア竈と組合わさるカマコ。10・11は、ミニチュア竈。5～11は長岡京期。12は、須恵器杯身。外面のみ灰黒色を呈する。焼成軟質。13は、須恵器杯蓋。全面に摩滅する。焼成軟質。14は、須恵器蓋。内面にかえりが付く。つまみ欠失。15は、須恵器平瓶。体部下半に自然釉付着。16は、須恵器甕。外面を平行叩き、内面に同心円のあて具痕を残す。軟質で灰白色を呈する。サヌカイト片は1トレンチ拡張部の土坑SK03と上げ

土から出土した。礫面を残す破片が２点あり、このうち１点は削器として使用した可能性がある。

４　ま と め

今回の調査では、長岡京の西四坊大路は確認できなかったが、右京域西縁の地から大規模な溝を発見した。溝の遺物は少ないが、その中に都城の祭祀遺物がある点は注目される。周辺は背後の丘陵地に古墳が築造され、その後も骨蔵器が埋納されるなど古代から中世の墓域が営まれてきたが、本溝の発見は長岡京期に大規模な施設が西方の丘陵地に存在したことを示唆している。溝SD08は、長岡京廃都を契機に機能を停止したと考えられるが、同時に古墳時代の遺物を多く混入することから周辺の古墳が破壊された可能性も考えられる。

溝の花粉分析試料と層位年代については、第８・９層（Ⅰ帯の時期）は、長岡京期から廃都後に堆積した層と考えられ、溝全体が腐植土で覆われた第４・６層（Ⅱ帯の時期）は９世紀末と考えられる。第１層（Ⅲ帯の時期）は、平安時代末～鎌倉時代前期。この中で注目される点は、Ⅰ帯の時期の環境変化の要因として人為的活動により周囲の森林が減少したことが指摘される点である。時代は異なるが、周辺では昭和30年代中ごろまで丘陵奥から瓦を焼くための土取りが行われており、馬の背に乗せて下まで運んだそうである。これは焼き物に適した粘土が採掘できることを物語っており、古代においても燃料と粘土、水が確保できれば窯業生産は可能であると考えられる。Ⅰ帯の時期における人為的な森林の減少を招いた原因として燃料となる木々の伐採による可能性も考えておきたい。今後、遺跡の実態が明らかにされることが期待される。

注１）木村泰彦・吉岡博之「北平尾古墳発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告』１ 1979年
２）山本輝雄「第98180次立会調査」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年
３）未報告。
４）山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年

長岡京跡右京第626次調査における花粉分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

長岡京跡右京第626次調査地は、長岡京西縁の丘陵地にあたり、発掘調査において少量の祭祀遺物等を包含する溝が検出された。本分析報告では、溝の堆積物について花粉分析を行い、植生や環境の変遷を復元し、周辺の土地利用の推定を行う。

２．分析方法

(1) 原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に比較的良好に保存される。花粉は、風媒花植物であれば空中に飛散し、虫媒花植物ならば昆虫により運搬され、多

くの場合、地表に落下後土壌中あるいは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。花粉分析では、堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率力から地層の対比を行ったり、植生や土地条件などの古環境や古気候の推定が行われる。一般には、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境の復元に用いられるが、考古遺跡では、堆積域の狭い遺構などの堆積物から、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

(2) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村 (1973) を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎) を施す。

5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離 (1500rpm、2分間) の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作成後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村 (1974、1977) を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3．試料

試料は、3トレンチの溝SD09のA—A′、断面の下位より、灰褐色砂と淡灰色シルト (9層、試料5)、暗黄灰色シルト (8層、試料4)、黒色腐植土 (6層、試料3)、暗灰赤色腐植土 (4層、試料2)、暗灰色礫混り砂泥 (1層、試料1) の計5点である。

4．結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉21、シダ植物胞

子2形態の計56である。これらの学名と和名および粒数を付表2に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

［樹木花粉］

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属―アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属―ケヤキ、エノキ属―ムクノキ、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、カキ属、エゴノキ属、モクセイ科、ツツジ科、ニワトコ属―ガマズミ属

［樹木花粉と草本花粉を含むもの］

クワ科―イラクサ科、マメ科、ウコギ科

［草本花粉］

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科―ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ササゲ属、アリノトウグサ属―フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

［シダ植物胞子］

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

花粉群集の変遷から、下位より3つの花粉分帯を設定した。花粉分帯にそって花粉群集の特徴を記す。

1）Ⅰ帯（試料4、5）

樹木花粉の占める割合が高く、コナラ属アカガシ亜属、シイ属が優占する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギが伴われる。コナラ属アカガシ亜属は上位に向かって減少傾向を示す。草本花粉ではイネ科とヨモギ属が低率に出現する。イネ科とヨモギ属は上位に向かって増加する。

2）Ⅱ帯（試料2、3）

樹木花粉の占める割合がやや高いが、草本花粉とシダ植物胞子の割合が高くなる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属とシイ属が減少し、草本花粉のイネ科が増加する。他にマツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、マメ科、カヤツリグサ科が増加する。

3）Ⅲ帯（試料1）

草本花粉において、イネ属型の出現率がやや高くなり、オモダカ属、イボクサ、ミズアオイ属の水湿地草本が伴われる。他にソバ属とササゲ属の栽培植物が出現する。樹木花粉は前帯と大きく相違しない。

なお、各試料において寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

5．考察

植生および環境の変遷を花粉分帯にそって、堆積層の下位から推定復元を行う。

（1）Ⅰ帯の時期：灰褐色砂と淡灰色シルト（9層）、暗黄灰色シルト（8層）

周辺はカシ（コナラ属アカガシ亜属）とシイ（シイ属）を高木相とする照葉樹林が分布する。生態上から、カシ林は適温な丘陵下部に、シイ林は乾燥した尾根筋などの上部に分布していたと推定される。上位に向かってカシ林がやや減少し、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科の草本がやや増加する。人為的活動により周囲の森林が減少し、イネ科を主とする人里植物ないし耕地雑草が増力目したと推定される。

（2）Ⅱ帯の時期：黒色腐植土（6層）、暗灰赤色腐植土（4層）

カシ林とシイ林の照葉樹林が急減し、イネ科やマメ科の人里の草本が増加する。イネ属型や栽培植物の花粉が伴われないため、耕地の拡大ではなく、森林の伐採が行われた後の二次遷移による草本の増加と考えられる。スギを主とする針葉樹花粉が増加するが、コナラ属アカガシ亜属とシイ属の減少に伴う相対的増加と考えられる。

（3）Ⅲ帯の時期：暗灰色礫混り砂泥（1層）

イネ属型花粉が多くなり、オモダカ属、イボクサ、ミズアオイ属の水田雑草の性格をもつ水湿地草本が伴われることから、周辺で水田が拡大し比較的近接したところで水田が営まれたとみなされる。花粉では反映されにくい栽培植物のソバ属とササゲ属が出現し、周囲でソバやマメの畑が営まれたと推定される。

6．まとめ

長岡京跡右京第626次調査のSD09のA－A′、断面の堆積物について花粉分析を行った結果、植生および土地利用の変遷が認められた。すなわち、SD09の下部の時期はカシやシイを主とする照葉樹林が分布していた。中部（腐植層）の時期になると、森林が伐採され減少し、イネ科やマメ科の草木が増加し、植生の二次遷移が行われた。上部になると周辺で水田が拡大し、比較的近接したところで水田が営まれ、周囲ではソバやマメなどの畑作が営まれていたと推定された。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院、p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

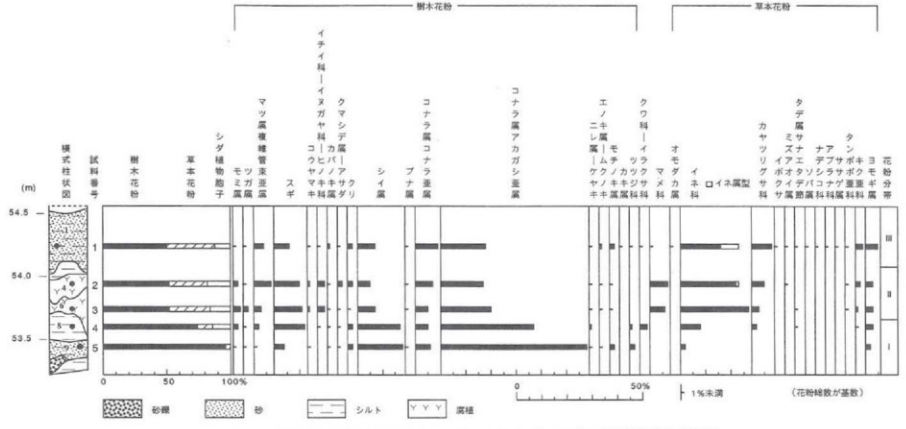
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として．第四紀研究，13.．p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純ほか（1981）農耕史の花粉分析学的研究．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学，昭和55年度年次報告書，文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括版，p.147-153.

付表2　長岡京跡右京第626次調査における花粉分析結果

分類群		SDO9				
学名	和名	1	2	3	4	5
Arboreal pollen	樹木花粉					
Abies	モミ属	1	9	13	7	2
Picea	トウヒ属			1		
Tsuga	ツガ属	3	4	8	3	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	20	29	11	6	1
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属		1			
Cryptomeria japonica	スギ	27	42	45	41	15
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	6	4		1
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupessaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	12	12	2	
Juglans	クルミ属	1	1		1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	2			3	
Alnus	ハンノキ属	5				
Betula	カバノキ属	6	1	1	2	1
Corylus	ハシバミ属	1		1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	2	7	1	3	3
Castanea crenata	クリ	11	8	2	7	6
Castanopsis	シイ属	31	23	26	61	4
Fagus	ブナ属	2	3	3		1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	44	30	19	19	21
Quereus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	88	72	78	131	195
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1	4	2	5	1
Celtis-Aphananthe	エノキ属-ムクノキ	6	4	2		1
Rhus	ウルシ属		1			
Ilex	モチノキ属	11	2	1		7
Acer	カエデ属					1
Aesculus turbinata	トチノキ					1
Diospyros	カキ属	1				
Styrax	エゴノキ属					1
Oleaceae	モクセイ科					1
Ericaceae	ツツジ科	1			4	6
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	2		2		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	4			9	
Leguminosae	マメ科	4	28	23		
Araliaceae	ウコギ科				3	
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Sagittaria	オモダカ属	2				
Gramineae	イネ科	78	94	108	30	7
Oryza type	イネ属型	33	2		1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	36	23	11	8	
Eriocaulon	ホシクサ属		1			
Aneilema keisak	イボクサ	1				
Monochoria	ミズアオイ属	2	3			
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1			1	1
Fagopyrum	ソバ属	1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1				
Cruciferae	アブラナ科	2				
Vigna	ササゲ属	1				
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	4	1			
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科		1			
Apiodeae	セリ亜科	1		1		
Valerianaceae	オミナエシ科		1	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	2	3		
Asteroideae	キク亜科	13	7	5	1	
Xanthium	オナモミ属			1		
Artemisia	ヨモギ属	23	11	10	10	5
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	19	12	16	35	2
Trilate type spore	三条溝胞子	51	84	63	22	2
Arboreal pollen	樹木花粉	270	259	232	295	326
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8	28	23	12	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	201	147	141	51	12
Total Pollen	花粉総数	479	434	396	358	338
Unknown Pollen	未同定花粉	7	4	1	6	1
Fern spore	シダ植物胞子	70	96	79	57	4
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)



付表3　長岡京跡右京第626次調査 SD09（A―A′ライン）における主要花粉ダイアグラム

第２章　長岡京跡右京第631次(7ANMKI-6地区)調査概要

― 長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡 ―

１　はじめに

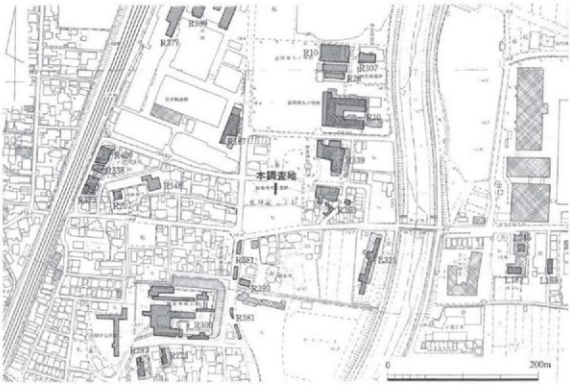
1　本報告は、1999年２月１日から1999年３月12日まで、長岡京市東神足二丁目７において実施した長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡、勝龍寺城跡の発掘調査に関するものである。調査面積は84㎡である。

2　本調査は、遺跡範囲確認調査として、室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡の資料を得ることを主な目的に実施した。

3　調査は、平成10年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センターの原　秀樹が担当した。

4　調査の実施に当たり、土地所有者をはじめ、神足神社、近隣の土地所有者、神足自治会など地元の方々には種々のご協力とご理解を得た。

5　本報告は、今年度に実施した遺物と遺構の整理報告である。本書の執筆および編集は原が行った。

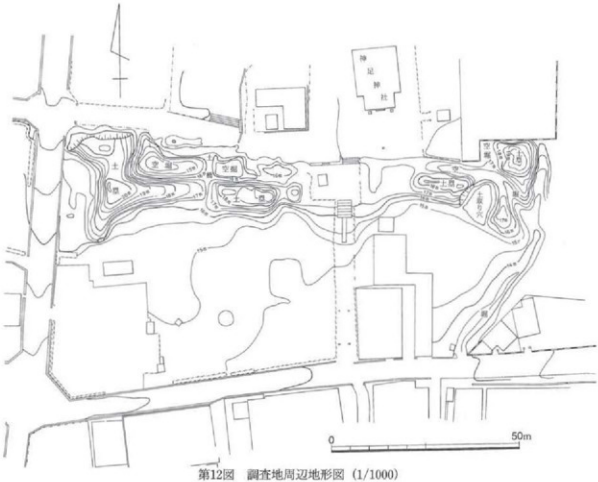


第11図　発掘調査地位置図（1/5000）

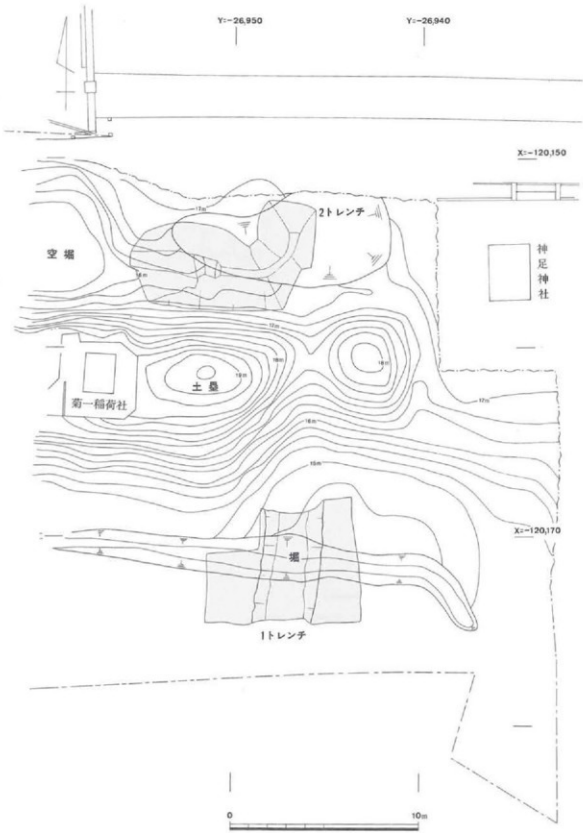
2　調査経過

調査地は、勝竜寺城公園から北東約200mのところに位置する。今回の調査は、元亀2（1571）年に細川藤孝が大改修した勝龍寺城惣構の中で、現在では神足神社参道西側に残るだけとなった土塁と空堀の現状を把握するとともに、地元の有力土豪・地侍である神足氏の城に関する資料を得ることを目的に実施した。調査範囲は、現存する土塁の東端から土塁上に鎮座する菊一稲荷社の祠付近までとした。調査は、始めに土塁に密生する竹の伐採と清掃を行い、掘削前の写真撮影を行った後、地形測量図を作成した。調査区の設定にあたっては、土塁の裾が内側に入り込んでやや狭くなり、頂部が凹んだところの南北両側に調査トレンチを入れた（第13図）。これは当初、最終的に土塁を南北に断ち割ることを目的に土量の少ないところを意図して選定したが、諸般の事情で今回は見送ることとなった。調査トレンチは、土塁南側を1トレンチ、北側の空堀部分を2トレンチとした。

神足神社をはさんで東西に延びる土塁と空堀は、東側部分が宅地化されるまでは第12図のとおり残存していた。東西方向の土塁は東端で南へ折れ、空堀も南へ折れる状況が観察できた。昭和59（1984）年に実施された右京第163次調査[注1]では、土塁の下から古墳が発見され、初めて外郭施設に墳丘が利用されたことが判明した。その後、惣構の堀の調査と勝竜寺公園の整備に伴う本丸

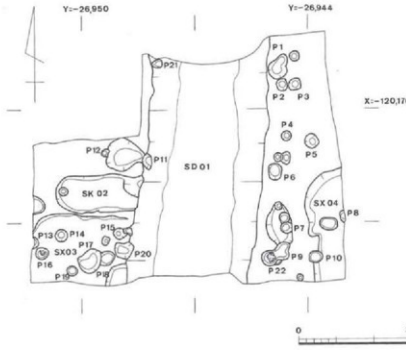


第12図　調査地周辺地形図（1/1000）
京都考古学研究会測図

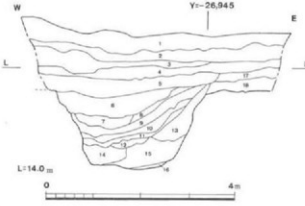


第13図　勝龍寺城の土塁・空堀と調査区（1/200）

と沼田丸の調査[2]、重臣および中小家臣団の屋敷地の調査[3]などが行われている。両トレンチは、調査後に埋め戻しを行った。



第14図　1トレンチ検出遺構図（1/100）



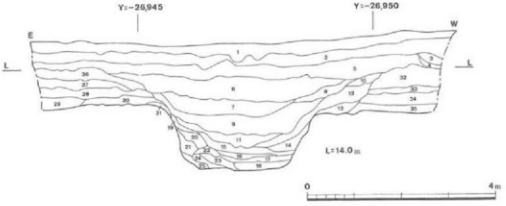
1　表土
2　明黄褐色砂質土（10YR6/8）と
　暗褐色砂質土（10YR3/3）
3　暗褐色砂質土（7.5YR3/3）とパラス
4　褐色砂質土（10YR4/6）
5　黒褐色礫混り土（7.5YR3/2）
6　黒褐色ブロック混り褐色粘質土
　（7.5YR4/4）
7　黄色粘質土（2.5Y8/6）
　ブロック混りにぶい黄褐色土（10YR5/4）（小礫多量）
8　黒色土（N1.5）混り
　褐色粘質土（7.5YR4/6）
9　褐色礫混り土（10YR4/6）
10　暗褐色礫（7.5YR4/6）（小礫多量）
11　褐色砂質土（7.5YR4/6）
12　灰色砂質土（N4）（小礫多量）
13　黒褐色土（2.5YR2/2）
14　黄色粘質土（2.5Y8/8）と
　暗灰色砂質土（N3）（小礫多量）
15　黄色粘質土混り暗灰色土（N3）
16　暗灰色土
17　黄褐色砂質土（10YR5/6）
18　黒色礫混り土（7.5YR1.7/1）

第15図　1トレンチ溝SD01北壁土層図（1/80）

3　検出遺構

［1トレンチの遺構］　土塁南側の裾に設定した（第14図）。土塁と平行する現代溝は東壁断面で深さ0.7mの断面U字形を呈する。

調査区の層位は、竹の根株が張る表土（第1層）と、昭和10（1935）年の大洪水で決壊した小畑川から運ばれた泥や砂礫の堆積層（第2層）がある。表土に混入する小さな礫は、土塁と平行する溝の北側に多く、南側にはみられない。以下、近世の旧表土、畑土を除去すると、多量の礫と遺物を包含する黒褐色礫混り土が現れる。南壁で試掘したところ、検出面での幅は約5.2mで、南北方向の遺構であることが予想された。旧表土直下の遺構はこれ以外に確認できず、他の柱穴や土坑などは地山面から検出している。この間の包含層の層厚は、北で約0.5m、南で約1mあり、地山は緩やかに北から南へ傾斜している。主な検出遺構は、堀SD01と柱穴、土坑などである。



1　表土
2　明黄褐色砂質土（10YR6/8）と暗褐色砂質土（10YR3/3）
3　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
4　明黄褐色パラス（2.5Y6/6）
5　褐色砂質土（10YR4/6）
6　黒褐色礫混り土（7.5YR3/2）
7　黄褐色砂質土（10YR5/6）小礫含む
8　明黄褐色砂質土（10YR6/8）小礫含む
9　暗褐色砂質土（10YR3/4）細かな礫
10　明黄褐色砂質土（10YR6/6）＋赤黒色ブロック（10YR2/1）
11　褐色斑紋入褐灰色砂質土（10YR6/1）細かな礫と小礫
12　褐色斑紋入褐灰色砂質土（7.5YR4/1）細かな礫と小礫
13　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）小礫含む
14　褐色斑紋入灰色砂質土（N5）細かな礫多く含む
15　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）細かな礫集中
16　暗灰色パラス（N3）5cm大の小石集中
17　褐色斑紋入灰色シルト（N5）
18　灰色パラス（10Y4/1）細かな礫含む
19　赤黒色シルト（5R1.7/1）
20　黄色シルト（5Y8/6）＋灰色砂質土（5Y6/1）小石含む
21　褐色斑紋入灰色砂質土（N5）
22　暗灰色ブロック混り灰色砂質土（10Y4/1）
23　黄色シルト（5Y8/6）ブロック
24　灰色砂質土（N5）細かな礫含む
25　オリーブ灰色（2.5Y5/1）パラス（礫細かい）
26　黒褐色礫混り土（7.5YR3/2）
27　黒褐色ブロック混り褐色粘質土（7.5YR4/4）
28　黄色粘質土（2.5Y8/6）ブロック混りにぶい黄褐色土（10YR5/4）（小礫多量）
29　褐色礫混り土（10YR4/6）
30　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
31　黒色ブロック混り暗灰色土（N3）
32　明黄褐色砂質土（10YR6/6）
33　暗褐色砂質土（7.5YR3/3）
34　褐色土（10YR4/4）
35　黄褐色土（10YR5/8）

第16図　１トレンチ南壁土層図（1/80）

堀ＳＤ01　調査区中央部で検出した南北方向の溝で、約６ｍ分検出した。北でわずかに東に振る。規模は、南壁の検出面では幅約5.2mあるが、地山面では北壁が3.2m、南壁は３ｍである。深さは旧表土直下から1.8～２ｍである。溝の形状は、底が平らな断面逆台形で、南壁では西側に小さな平たん面がある。堀に入り込む土砂は東側から流入しており、半分程度埋まった後に一気に埋め戻したようである。遺物の大半は、埋め戻された埋土に投棄されたものであり、底付近からはほとんど出土していない。堀は滞水した状況が認められないことから空堀と考えられる。底面の標高は11.9mである。堀は土塁の下を北へ延び、南にも延びることは間違いないが、今回は掘り進めることはできなかった。これまで当地に大規模な堀が存在することは知られておらず、地表面観察からもその痕跡は確認されていない。

土坑ＳＫ02　堀ＳＤ01に東端を切られる。一辺2.2×１ｍの隅円長方形。深さは0.1m前後。

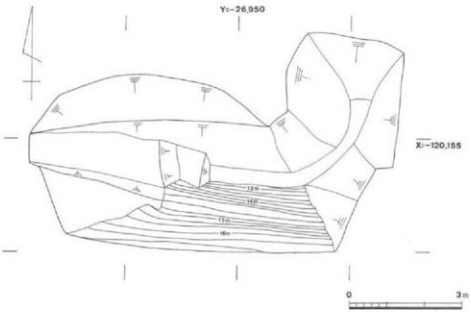
落ち込みＳＸ03　調査区西南隅の凹み。深さ0.2m前後。落ち込み埋没後に柱穴が切っている。

落ち込みＳＸ04　調査区東南隅の凹み。深さ0.3m前後。落ち込みのほうが柱穴より古い。

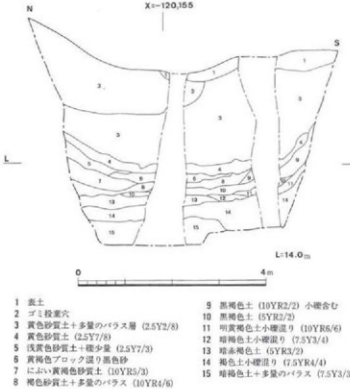
柱穴Ｐ１～Ｐ21　直径0.3m前後のものと、直径0.4～0.5m前後のやや歪んだ円形がある。

柱穴Ｐ22　直径0.4mの円形掘形内に石を据えている。

［２トレンチの遺構］　現在は埋められて小さな凹みだけとなった空堀部分の調査（図版８



第17図　2トレンチ空堀実測図（1/100）



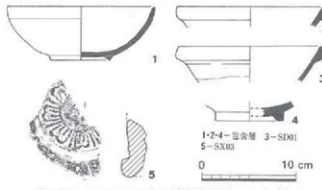
第18図　2トレンチ空堀東壁土層図（1/80）

（1））。空堀の北辺は神足神社境内地に入っており、予定地にも樹木が残ることから調査区は狭小なトレンチとなった（第17図）。

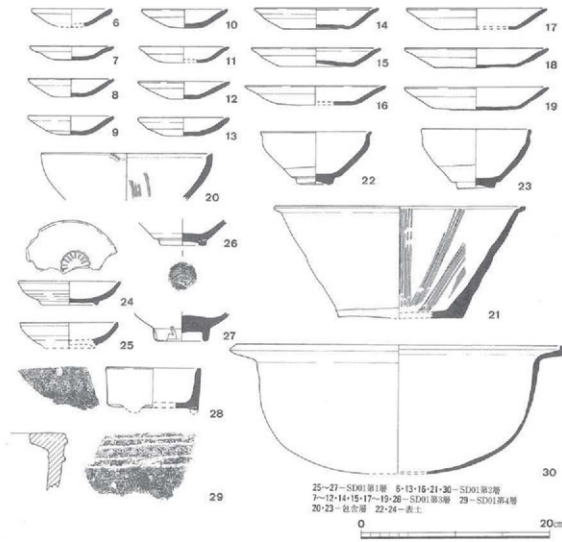
調査区の基本的な層位は、現代のゴミ投棄層（第1・2層）と、近世以後の埋め立て層（第3～8層）、土塁の崩落土（第9層以下）に分けられる（第18図）。ゴミ投棄層は約1mあり、北側から投げ込まれている。牛乳やジュース、調味料のびんなどがある。近世以後に埋め立てたと考えられる層は、層厚が2mある。特に第3・4層は多量のバラスを含む黄色の締まった層で、一気に埋めたものと考えられる。遺物は出土していない。明らかに江戸時代後半と考えられるのは第8層である。狐の土人形と土師器と陶器の灯明皿、軒桟瓦がまとまって出土した。土塁上の菊一稲荷社のものであろうか。土塁の下層に堆積する崩落土は、勝龍寺城廃絶後に流入した層であり、暗褐色～黒褐色を呈する埋土には多量の礫を含んでいる。空堀の底は部分的な確認しかできなかったが、平らな底を2m分検出した。底面の標高は12.3mである。

４　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナに10箱である。弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、塼輪、石器、土製品、金属製品、石製品などがある。このうち図示または写真に掲載できたものは第19～23図、図版９～11のとおりである。１は、瓦器椀。内外面摩滅する。12世紀後半から13世紀にかけてのものと考えられる。２・３は、口縁部を玉縁にする白磁碗。碗Ⅳ類[4]。４は、白磁碗の高台。内面と体部から高台にかけて施釉する。５は、小型の軒丸瓦。摩滅しているが、外縁部は楕円形になるかもしれない。平安時代中期ごろのものであろうか。６～19は、土師器皿。口径９～10cm、器高1.5～２cmの小皿（６～13）と、口径13～15cm、器高２

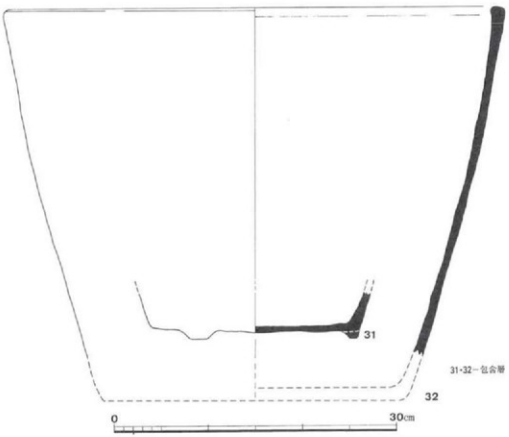


第19図　１トレンチ出土遺物実測図－１（1/4）



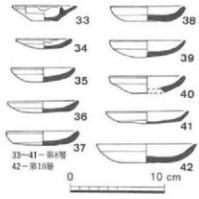
第20図　１トレンチ出土遺物実測図－２（1/4）

～2.5cmの大皿（14～19）がある。大皿は平らな底部と直線的に延びる口縁部からなり、底部の周縁には浅い凹みとわずかに突き出た凸状の高まりをもつ圏線が巡っている。口縁端部は丁寧なナデ調整を施す。8～11・13は口縁部に油煙が付着する。胎土は浅黄橙色を呈する。これらの土師器皿はその特徴から京都産の白土器と考えられ、時期的に細川藤孝が元亀2（1571）年に城を改修した時期に比定される。20は、擂り目と片口をもつ擂鉢。胎土は橙色。内外面とも摩滅しているが、部分的に灰黒色を呈する。口縁部の形態から大和の瓦質擂鉢と考えられる。口縁端部は内傾する面をもつ。21は、信楽産の擂鉢。擂り目は5本で1単位。22～26は、瀬戸・美濃産の施釉陶器。22・23は、鉄釉天目茶碗。23は、体部下半から高台全面に錆釉を施す。24・25は、灰釉皿。24は、内面に菊花のスタンプを押す。全面に施釉しており、高台内面には輪トチンが付く。26は、灰釉平碗。内面に重ね焼きの目跡が2個所残る。底部糸切りの後、輪高台を貼り付ける。26については、古瀬戸の中期段階と考えられる。27は、青磁碗。高台内面を除いて全面施釉する。見込みには花文と思われる不明瞭な文様をスタンプしている。28は、瓦器香炉。体部外面に8枚の花びらを図案化した菊花様のスタンプを押す。文様は1回ごとに押している。逆台形の高台が3個所に付く。29は、瓦器火鉢。2条の凸帯の間に施されたスタンプ文様はつる草がのびる曲線を図案化した唐草文様と考えられる。体部は方形で猫足がつくと考えられる。30は、土師器鍋。外面全体にススが付着する。31は、底部に逆台形の高台が3個所ついた火鉢と考えられる。32は、瓦器の深鉢で底部を欠失する。口径53.6cm。48は、中国明代の染付皿。

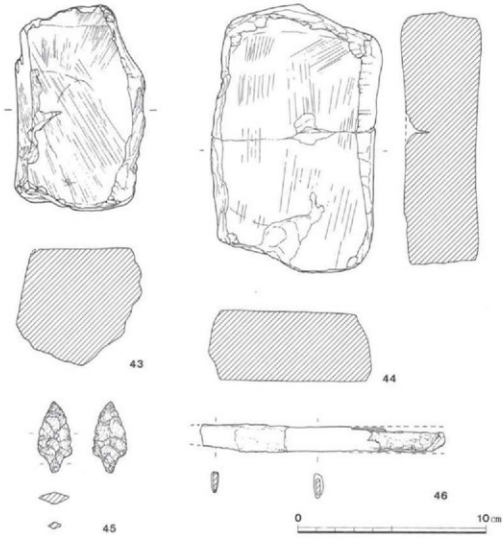


第21図　1トレンチ出土遺物実測図－3（1/4）

空堀から出土した遺物は、土師器皿（34～42）、陶器灯明皿（33）と、狐形の土製品がある（第22図、図版11(２)）。34は、口径６cm、器高1.1cm。内面にハケメが残る。35～40は、口径７～８cm、器高1.5～２cm。全体に器壁が厚く、底部未調整。36・38・39の口縁部には油煙が付着する。色調は橙色。41・42は混入品であろう。41は、12世紀後半を中心とする時期に、42は11世紀代と考えられる。33は、内面に灰黄色の釉を施す。外面は露胎。皿の内側には口径の半分の大きさの囲いがあり、１個所にU字形の切り欠きを設ける。口縁部外面に油煙が付着する。狐形の土製品は、長方形の台座（54～56）に乗った前立の狐像で、尾の形態は男根型をしている（53）。口に宝珠（50）と巻物（51）をくわえており、51は耳と巻物に朱色で着色したものがある。狐像は型押しした前後の像を合わせている。空堀からまとまって出土した江戸時代の土師器皿、陶器皿と狐形の土製品については、18世紀後半を中心とする時期



第22図　２トレンチ出土遺物実測図（1/4）



第23図　その他の出土遺物実測図（1/2）

ではないかと考えている。このほか、軒桟瓦や道具瓦などが出土している。

その他の遺物には、砥石（43・44）、打製石鏃（45）、小柄（46）がある（第23図、図版11（1））。43・44は、砂岩製。擦り面は2個所。45は、凸基有茎式の打製石鏃。弥生時代中期の神足遺跡では最も多く出土している。46は、鉄製の茎に銅を巻き付けている。

5　まとめ

今回の調査地は、16世紀前半に記された『乙訓郡条里坪付図』の「かうたにしろ」に当たることから、神足氏の城館である神足城の中心部分と考えられているところである。その後、元亀2（1571）年に細川藤孝が勝龍寺城を惣構のある城に大改修した後は、神足城が神足屋敷として城下に組み入れられ、現存する土塁と空堀が造営されるという歴史的な経過[5]がある。神足城については、当該期の遺物はこれまでにも多数出土しているが具体的な遺構については不明な部分が多い。同じ神足屋敷内で実施した右京第608次調査では、整地層を介して上下の遺構面があり、上面から城改修時に築造された転用石材を多用する石組み井戸を確認したが、下面から見つかった遺構の性格について特定するのは難しい状況であった。

今回検出した堀ＳＤ01は、東西の土塁、空堀と直交しており、その状況から堀はさらに南と北へ延びるのは間違いない。従来より土塁の幅が縮まり頂部も凹んで低くなっている部分は、古墳の墳丘が別に存在するかのようにもみえるが、今回の調査で土塁の凹部と堀を北へ延長したところで一致する点は相互の関連性が伺われる。最終的な判断は土塁の断ち割り後になるが、現状では堀を埋め立てた後に築いた土塁が沈下した可能性を考えている。

堀ＳＤ01は、遺構の関係から勝龍寺城が大改修された元亀2（1571）年を下限とするものである。堀から出土した京都産の土師器皿は、織田信長が永禄12（1569）年に造営した旧二条城出土の土師器皿と類似した特徴[6]をもつものであり、この点遺構の在り方と食い違いはない。土塁に先行する堀については、当地の地名「かうたにしろ」からみて神足城の遺構と考えられ、堀を埋めて新たに土塁と空堀を造営する過程は、神足城から神足屋敷に組み替えられた実態を具体的に物語る資料として注目される。

注1）岩崎　誠「右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第15冊 1985年
「右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第17冊 1986年
2）岩崎　誠「勝龍寺城発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第6集 1991年
3）鍋田　勇「右京第381次調査概要」『京都府センター概報』第49冊 1992年
岩崎　誠「右京第393次調査概報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
原　秀樹「右京第608次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年
4）山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
5）中井　均「第9章第2節二 勝龍寺城の改修」『長岡京市史』本文編一 1996年
6）小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

第３章　今里大塚古墳第３次調査概要

―長岡京跡右京第646次調査 ―

１　はじめに

1　本報告は長岡京市天神５丁目108に所在する今里大塚古墳の範囲確認調査の概要報告である。調査は1999年７月５日から８月17日まで行った。調査面積は51㎡である。

2　発掘調査は長岡京市教育委員会が主体となり、(財) 長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。調査には大阪大学大学院文学研究科考古学研究室の学生が参加した。調査担当は、福永伸哉（大阪大学大学院文学研究科助教授）と清家章（同助手）である。

3　写真撮影は主として清家が担当した。

4　図上の方位はすべて座標北を示す。

5　現地調査にあたっては、今里財産区ならびに子守勝手神社氏子総代をはじめ近隣の方々にはさまざまなご配慮を得た。

6　執筆は、清家と大阪大学の学生が担当し、分担は文末に記した。編集は福永指導のもと清家が担当した。

第24図　今里大塚古墳の位置（1/20000）

2　調査経過

周辺の遺跡　今里大塚古墳は西から東へ緩やかに傾斜する扇状地の末端に位置する古墳である（第24図）。今里大塚古墳の周辺には数多くの古墳が存在し、この地域が乙訓地域でも屈指の古墳集中地帯であることがわかる。乙訓地域の首長墳系譜に関する都出比呂志の研究[1]を参考にすると、古墳時代前期に隆盛を極めていた向日グループの系譜は中期以降古墳の築造が衰退していく。その一方で、今里大塚古墳の属する長岡グループにおいては、中期前葉に今里車塚古墳と今里庄ノ淵古墳、中期中葉に宇津久志古墳群が築造されるようになる。これらの変化は、中期を境に乙訓地域の盟主権が向日丘陵の首長から長岡地域の首長の手へと移動したことを示唆している。

中期後葉になると長岡グループでは大型の古墳が築造されず、盟主権が他地域の首長の手に移ったようである。しかし、後期初頭には舞塚古墳や塚本古墳が築造され、再び長岡グループの首長墳が明確になる。後期前葉には井ノ内稲荷塚古墳や井ノ内車塚古墳、長法寺七ツ塚古墳群が築造されるが、向日グループでも物集女車塚古墳が築造されている。この時期には両地域に有力首長が並び立つ状況をうかがい知ることができよう。

後期後葉になると他のグループで前方後円墳の築造が停止するなか、長岡グループにおいて唯一前方後円墳の可能性がある今里大塚古墳が築造される。今里大塚古墳の被葬者は乙訓地域の盟主権を完全に掌握していた首長であったといえよう。しかし、今里大塚古墳を最後に乙訓地域における大型古墳の築造は終焉を迎え、この後は各地で群集墳が築造されるにとどまる。

なお、今里大塚古墳周辺には古墳時代に属する集落遺跡も数多く存在する。その多くが長岡グループの隆盛する古墳時代中期から後期に属するもので、当該期の古墳に隣接するように分布し

第25図　トレンチ配置図（1/800）

ている。これらの集落遺跡と古墳の関係を追求することも今後の課題といえよう。

過去の調査　1968年に京都府教育委員会によって行われた測量調査の結果、初めて今里大塚古墳の墳丘と横穴式石室の基本的なデータを得ることができた。それによると、円墳と考えた場合の墳丘の直径は45m、高さ5.5mであり、横穴式石室の玄室長は6m、幅2.5m、高さ3m以上、羨道長10m以上である。今里大塚古墳が乙訓地域はもとより山城地方でも最大級の横穴式石室を持つ古墳であることが判明したのである。(2)

1984年には墳丘西側の水田地区で発掘調査が行われ、南北方向に走る2条の溝が検出された（第1次調査）(3)（第25図）。また、1988年に行われた墳丘北西部の発掘調査では周壕の一部が検出され、周壕が墳丘を円形に巡らずに、西側へとさらに続いていく状況が確認された（第2次調査）。以上の成果から、これまで円墳と考えられてきた今里大塚古墳が前方後円墳である可能性が浮上した。(4)その場合、前方部は後世に大きな削平を受けた結果、消滅してしまったと考えられる。現状では判断材料が極めて少ないため、築造当初の墳形を判断するには墳丘自体の調査を行う必要があった。

また1989年には市史編纂事業の一環として墳丘測量および横穴式石室の実測が大阪大学文学部考古学研究室によって行われている。(5)

調査経過　今回の調査は墳丘の形態や構造、前方部の有無に関する諸情報を得ることを目的として実施された。期間は1999年7月5日から8月17日までの44日間である。

発掘区は墳丘北側と西側の2カ所に設定した。設定後、各トレンチで墳丘残存面の検出にとりかかった。しかし両トレンチでは平面において残存墳丘面を認識することが難しく、結果として一部墳丘面を掘り抜いてしまったため、断面による確認にとどまった部分がある。その後は墳丘構造の解明に向け調査を続け、墳丘の構築過程に関するいくつかの新しい知見を得ることができた。そして8月10日には地元の住民と埋蔵文化財関係者を対象に説明会を行った。その後、記録作業を行った後、土嚢を用いて埋め戻しを行い、全ての作業を終了した。　（林正憲）

3　墳丘の状況

（1）墳丘北トレンチ

墳丘北トレンチは墳丘の残存状況と墳丘構築過程を明らかにするために、墳丘の北斜面に設定した長さ11.1m、幅1.5mのトレンチである（第26図）。調査の結果、墳丘残存面の状況と墳丘盛土の構築状況および構築過程を明らかにすることができた。ただし、墳丘残存面が平面的に検出できたのはトレンチ北半部のみで、南半部では断面から墳丘面を復元している。以下では、盛土の堆積状況を中心に記載を進めていくことにする。

トレンチの南側では表土より20cmほど掘り下げたところで、明黄褐色シルトないし砂質土を主体とする一連の土層が検出された（盛土①）。この土層は標高40.0mから39.4mにわたって確認され、ほぼ水平を示す細かい単位の土層によって形成されている。これらの土層がいずれも均質な色調および土質によって形成されていることから、自然堆積によるものではなく、人為的に構

築された墳丘盛土と判断した。同様の層は西トレンチでも確認されており、墳丘頂部を形成する土層と考えられる。これらの明黄褐色土層は標高39.4m付近を境として認められなくなり、それより下層では黒褐色土や暗褐色土からなる土層が主体となる。このような土色の差に加えて、39.3～39.4m付近にほぼ水平をなすラインが確認できることから、明黄褐色土層が盛られる直前に一度平坦面が形成されていた可能性が高い。ただし、このライン直上には黒褐色土（盛土②）が盛られ、その上に明黄褐色土が盛られているので、黒褐色土も意識的に盛られた可能性が高い。

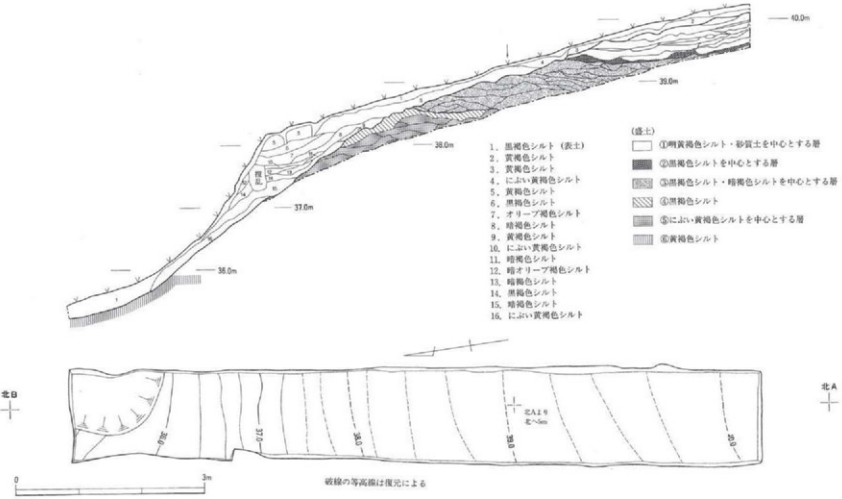
標高39.4m以下の土層は一様に細かい単位の土層によって形成され、墳丘内部に傾斜する方向で堆積しているものが多い（盛土③）。この点で、墳丘の外側に傾斜するように堆積している流土（1～16層）の状況とは好対照をなしている。また、これらの層に砂質土はほとんど含まれておらず、おおむねシルト質土によって形成されているのが特徴的である。

38.5m付近ではそれまでの細かい単位の土層とは異なり、検出幅で約2mにわたる大きな単位の黒褐色シルトの土層を確認することができた（盛土④）。この層の上面はほぼ水平をなし、これより下層で再び細かい単位の土層が認められることから、この水平面が意識的に形成された可能性が高い。したがって、39.3～39.4m付近で確認された境界と同様、この層の上面で墳丘構築時に平坦面が形成されていたと想定できる。

この黒褐色シルト層より下層ではにぶい黄褐色シルトを中心とする層が認められる（盛土⑤）。注目すべきことに、これらの層の中から埴輪片が数点出土した（第28図6・7）。これらの埴輪片は出土状況から今里大塚古墳に伴うものとは考えられず、さらにその諸特徴から古墳時代前期後半から中期の範疇に属するものと判断できる。以上のことから、今里大塚古墳の墳丘盛土には古墳時代前期の遺物を含む土が使用されたことがわかる。

標高37.4m以下では断面だけでなく、平面的にも墳丘残存面を確認することができた。残存面と判断したのは、断面同様の墳丘盛土の細かい単位を平面的に確認できたためである。おそらく当初の墳丘面が後世に削平された結果、残存面に盛土単位が露出することになったのであろう。また、断ち割りを入れていないために詳細は不明であるが、この墳丘残存面においても平坦面を形成している可能性のある土層のまとまりが確認できた。なお、この墳丘残存面を精査している際に、布留式甕の口縁部片が出土している（第28図1）。

標高35.9m以下では黄褐色シルトからなる均質な土層が確認できた（盛土⑥）。この黄褐色土層は北トレンチにおける最深部（標高35.23m）までの70cmの厚さにわたって確認できる。このように大きな土層が他に認められないため、当初は地山層と考えていた。しかし、西トレンチで確認された地山面の標高が34.75mであり、地山とするには標高がやや高い。また、2次調査で確認された地山層は赤褐色粘質土であり、西トレンチでは褐灰色シルトであった。このように、土質も他の調査区で検出された地山と大きく異なっている。したがって、この黄褐色土層を地山ではなく、大きな単位の盛土と解釈した。この見解が正しいとするならば、下層に大きな単位の盛土を積み、その上に細かく土層を積み重ねるという工程が復元される。一方、西トレンチでは盛土の最下部には細かい単位の土層が積み重ねられており、両トレンチでは最下層において盛土



第26図　墳丘北トレンチ平面図・東壁土層断面図（1/60）

の積み方に違いが認められることになる。つまり、墳丘の場所によって築造方法が部分的に異なっていた可能性がある。この点に関しては今後の調査結果に判断をゆだねたい。

以上の知見を整理すると、墳丘は何段階かに分けて構築され、その段階ごとに平坦面を形成していたようである。現状では2カ所で土層に境界が認められることから、少なくとも3段階を経ていたと判断できる。しかし、標高37.4m以下では墳丘残存面に断ち割りを入れなかったため、さらに数段階にわたって平坦面が形成されていたと考えられる。このうち38.5m付近に見られた平坦面は、今里大塚古墳の石室奥壁最上部の標高が約38.5mであることから、石室天井石の架構と関連がある可能性が高い。

さらに、墳丘盛土に今里大塚古墳築造以前の時期の遺物が含まれていたことが明らかとなった。遺物の中に朝顔形埴輪が含まれていることから、近隣にあった古墳を破壊して、その盛土を使用した可能性がある。

なお、他の遺物としては時期不明の須恵器片、陶磁器片がわずかに出土している。　（林）

（2）墳丘西トレンチ

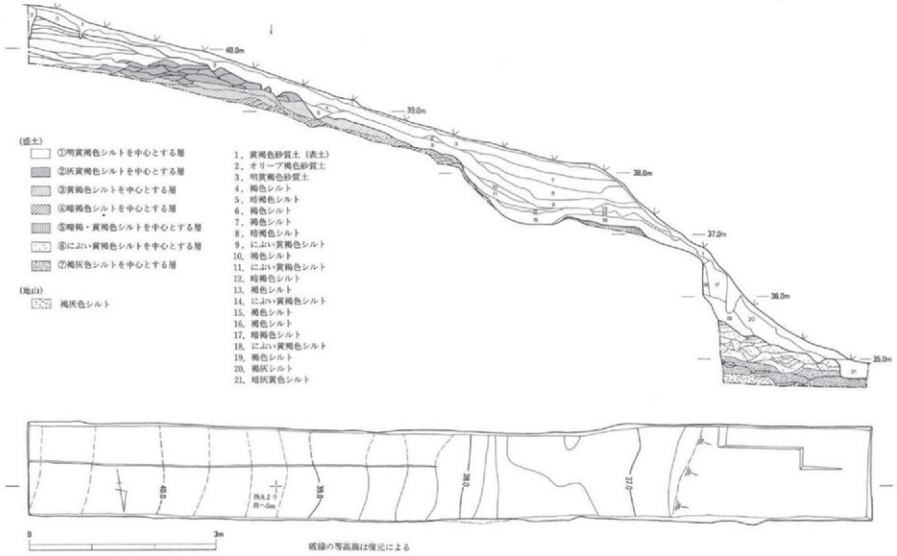
墳丘西側における盛土の残存状況や前方部の有無を明らかにする目的で墳丘西側斜面に設定した東西辺13.5m、南北辺1.5mのトレンチである（第27図）。表土および流出土を0.5mほど掘り下げると、西側に向かって約18°の角度で傾斜する細かい土層が積み重なった墳丘面を検出した。

残存する墳丘面は西側へ一定の角度で傾斜した後、トレンチ東端から約7mの付近で傾斜角度が急となり、トレンチ東端から約8～11mにおいて水平に近い面を形成する。11m付近では急激な崖面を呈するが、この崖面は状況から判断して後世に削平された結果、形成されたと考えられる。以下、層序の関係と墳丘盛土について詳しく述べることにする。

トレンチ東部（墳頂部側）では、標高約39.7～40.5mで明黄褐色シルトを中心とした層から構成される盛土を確認した（盛土①）。表土を含めた上層（1～9層）とは異なり、遺物を含まず均質な土で構成されていることから墳丘盛土の可能性が高いと判断した。また、盛土①はいずれも全体的に砂質で小礫を含むが、非常に堅く締まっており、土を盛っていく際に突き固められたことが推測される。それぞれの層は、厚さが10～15cm、水平長が2m以上である。

トレンチ中央部東側では、標高約39.4～39.7mで、厚さ10cm前後、水平長1m未満の細かい単位の層から構成される盛土を確認した（盛土②）。盛土は、一部に褐色系の土を含みながら灰黄褐色を主体としたシルトからなる。これらの層からも遺物は検出されず、人為的な土層の堆積状況から判断して墳丘盛土と考えたのである。そしてこの下位の標高38.6～39.4mでは、再び厚さ10～15cm、水平長2m以上の層からなる盛土が認められる（盛土③）。この盛土は、黄褐色シルトを中心として形成される。さらに下位の標高37.8～38.6mでも、再び細かい単位で施される盛土が認められる（盛土④）。土層は暗褐色系を中心としたシルトからなるが、一部には暗褐色系と黄褐色系が交互に盛られた状況が見られる。このように、墳丘各所でみられる細かい単位で構成される盛土は、その単位ごとに土質を意識的に変えた状況がうかがえる。

トレンチ中央部西側では、上述のように標高約38.3m、トレンチ東端から約7mの地点で傾斜



第27図　墳丘西トレンチ平面図・南壁土層断面図（1/60）

が転換し、標高37.2m付近、トレンチ東端から約８m地点より西へ水平面を形成する。この面の直上の層（15・16層）からは所属時期不明の土師器片や須恵器片が出土しており、その上に形成される層（12層）からは瓦片が出土している。

ここで問題となるのはこの水平面に関する解釈である。これまで行われた周辺調査では、この古墳が前方後円墳である可能性が指摘されている。前方後円墳ととらえた場合、この箇所は前方部と後円部の接合部分と推測され、この検出された急な斜面と水平面はその鞍部の形状を反映しているとも考えられる。ただし、この水平面の上の層からは後世の遺物が出土しているため、後世の削平の結果このような形状を呈するに至ったとも考えられる。いずれにしても、今回の調査から得られた情報からは、当古墳が前方後円墳かどうか判断するにはなお不十分である。

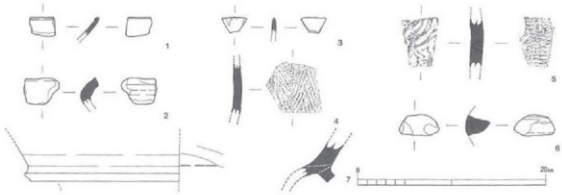
水平面の西側、標高約36.5m付近においてきわめて急な崖面が認められるが、状況から推測すると後世の削平等によるものと考えられる。墳丘残存面ととらえた面より上の層（17～20層）については、時期を特定できる遺物は検出されていないものの、土質のしまりがないこと、上から流れ込んだような堆積状況を呈することから墳丘盛土ではないと判断した。墳丘盛土は、標高35.0～36.2mにおいて、厚さ10cm前後、水平長１m未満の細かい単位の土層から構成される（盛土⑥）。盛土は、にぶい黄褐色系のシルトから成る。また、標高34.7～35.0mにおいては、盛土⑥よりやや長い褐灰色系シルト土層が積み重なっている（盛土⑦）。この土層からは、遺物がまったく出土せず、今回得られた情報からだけでは墳丘盛土であるか古墳築造以前の堆積土であるか判断するのは困難である。トレンチ西端では、盛土⑦まで掘り込まれる攪乱（21層）が認められた。検出された地山上面の標高は約34.7mである。

ここで改めて墳丘盛土の構築過程を見てみることにする。最下層には細かい単位の盛土⑥が存在し、次に比較的長い単位の層から構成される盛土⑤が施される。この工程は２度繰り返される。すなわち、細かい単位から成る盛土④と長い単位の層から成る盛土③が施され、その後再び細かい単位から成る盛土②と長い単位の層から成る盛土①が施されるのである。この中で最後に見られる盛土①（明黄褐色土層）は、他の盛土とは色調が明瞭に異なる。この盛土①が始まる面は標高約39.7mで明瞭な水平面をなしている。北トレンチでも同様な水平面が認められ、その標高は約39.5mであり類似したレベルに位置する。このレベルは、石室奥壁最上部より約１m高い。天井石の厚みから考えると、天井石の中途の高さからこの盛土①は始まっていると考えられる。こうしたことから考えると、盛土①は天井石架構後の墳丘構築最終段階に施された可能性が高い。

なお、墳丘面に葺石は施されず、その痕跡も認められない。墳丘の段築成については、北トレンチと同様、存在しなかった可能性が高い。（西谷彰）

4　出土遺物

遺物は総数250点余りが出土した。所属時期は古墳時代からほぼ現代まで及ぶが、古墳築造時期を確実に示す遺物を指摘することは困難である。その内訳は、土師器片約200点、須恵器片３点、埴輪片約30点、陶磁器片５点、瓦片約10点である。多くは古墳築造後の堆積土および墳丘流



第28図　出土遺物（1/4）

出土からの出土であるが、墳丘盛土中から出土した土師器細片もわずかに存在する。

土師器（第28図１・２）　部位のわかるものは２点である。いずれも甕の口縁部である。１は北トレンチ墳丘盛土中からの出土である。口縁を内湾させ、口唇をやや内傾させる。内側はやや肥厚し、外面端部を丸くおさめる。調整は表面が風化しているため判然としないが、内外面ともヨコナデと思われる。所属時期は、形態の特徴から布留式中段階を前後するものと考えられる。

２は西トレンチ崖面付近の17～20層からの出土である。口縁は外反気味で、端部内面は若干の立ち上がりを形成する。調整は内外面ともにヨコナデが施されている。器壁が約１cmとやや厚く、短い口縁であるという特徴を加味すると長岡京期のものと考えられる。

須恵器（第28図３～５）　部位のわかるものは坏蓋あるいは何らかの坏部と考えられる口縁部片１点である。３は西トレンチ崖面付近の堆積土内から出土した。直線的な口縁で端部を丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。このほか甕の胴部と考えられる２点が挙げられる。４は北トレンチ堆積土内から出土した。外面は平行タタキ目が重なっており、内面は丁寧なナデによって当て具痕が消されている。５は西トレンチ崖面付近の堆積土内からの出土である。外面は格子状タタキ目が見られ、内面は同心円状の当て具痕が重なっている。これら須恵器の所属時期については限定しえないものの、５に関しては上述した特徴と硬質であるという点から、当古墳の築造時期以降の比較的新しいものである可能性が高い。

埴輪（第28図６・７）　部位が明らかなものは２点である。６は北トレンチ墳丘盛土内から出土した断面三角形を呈する突帯である。一部に埴輪本体の器壁から剝がれた状況を示す面が見られるが、その面の形状から推測すると朝顔形埴輪の胴部と口縁部の接点に付いていたと考えられる。調整は外面においてヨコナデが見られる。７は北トレンチ墳丘盛土内から出土した朝顔形円筒埴輪である。口縁部が中途で緩やかに屈曲するもので、屈曲部外面に断面コの字形で端面に凹線状の窪みを有する突帯を貼り付ける。調整は外面がヨコナデ、内面がナデである。これらの埴輪片はいずれも盛土内からの出土で、今里大塚古墳より古い時代のものである。　（西谷）

5　ま と め

今回の調査では、これまで課題とされていた今里大塚古墳の墳形や築造時期を確定することは

できなかった。これらの課題に関しては、今後さらに予定されている確認調査の成果をもって判断したい。しかし、この古墳の墳丘部分で実施された初めての発掘調査であり、墳丘構造にかかわるさまざまな知見を得ることができた意義は大きい。その内容は前章までに記した通りであるが、それをまとめると以下のようになろう。

墳丘の外表施設としては埴輪も葺石も認められない。古墳は大部分が盛土で築造されている。北トレンチと西トレンチの墳頂近くでは、黄褐色シルトの均質な盛土が幾重にも水平に薄く堆積している状況が検出されたが、こうした比較的色調の明るい均質な盛土が古墳表面を覆っていたものと思われる。この黄褐色の盛土より下は、小さな単位の盛土が墳丘内部にむかって内傾して堆積している状況が認められた。そうした小さな単位の盛土は無秩序に積まれているのではない。北トレンチでは盛土が水平面を形成する場所が2箇所確認された。これは、盛土を積んでいく過程で、細かい単位の盛土を積んだ後に水平面を作り、さらに細かな単位の土を積んでいくという作業工程が何度か繰り返されたことを示している。西トレンチでも同様な水平面が確認されている。

また、盛土中から布留式甕の破片と古墳時代前期あるいは中期のものと考えられる埴輪片が出土した。この埴輪の存在は、これまでに知られていない古墳が今里大塚古墳の周辺に存在した可能性を示しており、乙訓地域の首長系譜の動向を研究する上で重要な新情報といえる。

乙訓地域では、前期からいくつもの首長系譜が認められ、後期にいたるまで各系譜で盛衰を繰り返しながらも古墳が築造され続けてきた。しかし、6世紀後半までには各系譜において大形古墳の築造が停止され、乙訓地域では今里大塚古墳以外に明確な首長墓は知られていない。また、今里大塚古墳は山城でも最大級の横穴式石室を有する古墳である。この2つのことから、この古墳の被葬者が巨大な勢力を持ち、少なくとも乙訓全体に影響力を有していたようすが窺える。今里大塚古墳の墳形が前方後円墳が否かという問題は、その評価を大きく左右する重要な問題である。いずれにしても、古墳時代後期における乙訓地域の首長の動向やその支配体制、さらにはヤマト政権とこの乙訓の関係を知るためには、今里大塚古墳の詳しい情報が不可欠である。貴重な文化財である今里大塚古墳を保存・活用していく意味からも、今後の継続調査に期待したい。

（清家）

注1）都出比呂志　「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22号史学篇　大阪大学文学部　1988年
2）堤　圭三郎・高橋美久二　「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968）』京都府教育委員会　1968年
3）岩崎　誠　「右京第178次（7ANIOK地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度　財団法人長岡京市埋蔵文化財センター　1985年
4）木村泰彦　「長岡京跡右京第322次（7ANIOK-2地区）調査概要　―今里大塚古墳第2次調査―」『長岡京市文化財調査報告書』第22冊　長岡京市教育委員会　1989年
5）山本輝雄　「今里大塚古墳」『長岡京市史』資料編一　長岡京市史編纂委員会　1991年

第4章　井ノ内車塚古墳第3次調査概要

―長岡京跡右京第647次調査―

1　はじめに

1　本報告は長岡京市井ノ内向井芝4に所在する井ノ内車塚古墳の範囲確認調査の概要報告である。調査は1999年7月19日から8月17日まで行った。調査面積は35㎡である。

2　発掘調査は長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。調査には大阪大学大学院文学研究科考古学研究室の学生が参加した。調査担当は、福永伸哉（大阪大学大学院文学研究科助教授）と清家章（同助手）である。

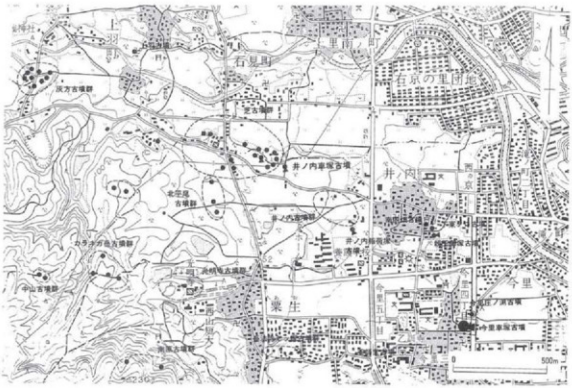
3　写真撮影は主として清家が担当した。

4　図上の方位は全て座標北である。

5　現地調査にあたっては、土地所有者の方ならびに子守勝手神社氏子総代をはじめ近隣土地所有者の方々から格別のご配慮を得た。

6　墳丘測量図のスケールが以前の報告とは異なるが今回掲載の図が正確なものである。

7　本報告の執筆は、清家と大阪大学の学生が担当し、分担は文末に記した。編集は福永指導のもと清家が担当した。



第29図　井ノ内車塚古墳の位置（1/20000）

2　調査経過

周辺の古墳　井ノ内車塚古墳は、阪急西向日駅の西方約2㎞の竹藪の中に所在する前方後円墳である。地理的には、桂川の支流である小畑川によって形成された低位段丘上に位置し、付近の標高は48m前後である。井ノ内車塚古墳のある乙訓地域は、数多くの古墳が営まれているが、それらの古墳は樫原・山田グループ、向日グループ、長岡グループの3つの首長系譜として捉えることができる。(1)

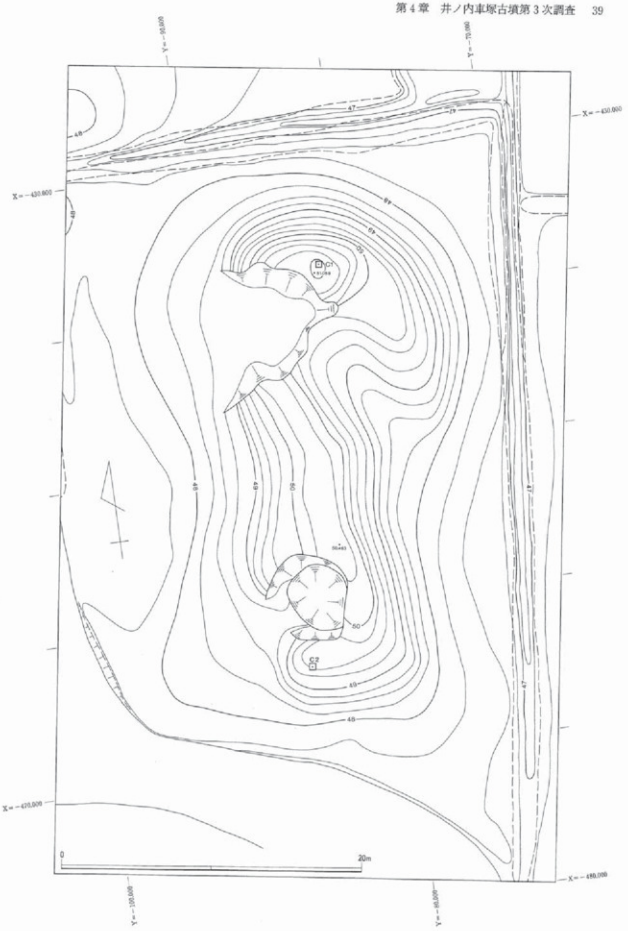
乙訓地域の首長系譜の中で初めに大規模な首長墳を築くのは向日グループで、平地を見おろす向日丘陵上に元稲荷古墳が築かれ、続いて五塚原古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳が築かれている。向日グループに若干遅れて首長墳系譜を形成するのは北の樫原・山田グループである。ここでも一本松古墳、百々池古墳、天皇ノ杜古墳が築かれ一連の首長墳の造営が認められる。これに対して、長岡グループでは長法寺南原古墳を除いて前期には有力な首長墳が存在しない。

中期に入ると長岡グループにおいて大規模な首長墳の造営が行われるようになり、前方部に鉄器埋納施設を持つ恵解山古墳や、今里車塚古墳が築かれる。これに対して向日グループではこの時期の大規模な首長墳は見られないが、後期の物集女車塚古墳の石室石材に長持形石棺が転用されていたことから有力な首長墳の存在が推測される。樫原・山田グループでは天皇ノ杜古墳以後大規模な首長墳の造営がしばらく認められないが、中期後葉には、山田桜谷1号墳・2号墳、毘塚古墳が造営されるようになり、他のグループに有力な首長墳が見られないことから、規模が小さいながらもこの時期における乙訓地域の盟主であったと考えられる。

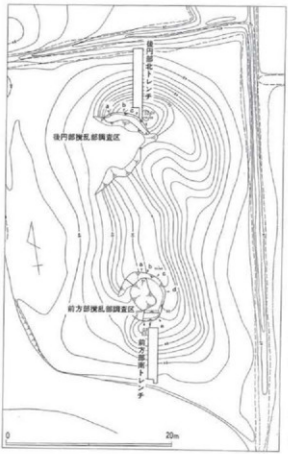
後期に入ると、樫原・山田グループでは中期に引き続き、清水塚古墳、天鼓森古墳と規模の大きな前方後円墳の造営を続ける。向日グループでも横穴式石室に家形石棺を収め豊富な副葬品を伴い、この時期の盟主と目される物集女車塚古墳が造営される。長岡グループでも物集女車塚古墳と相前後する時期に井ノ内稲荷塚古墳・井ノ内車塚古墳が築造される。井ノ内稲荷塚古墳は近年の調査によって、乙訓地域の首長系譜を考える上で重要な情報を提供している。井ノ内車塚古墳は稲荷塚古墳に後続する古墳とされてきたが、これまで本格的な調査が行われたことがなく、その位置づけについては未確定であった。こののち乙訓地域では、長岡グループにおいて山城地方でも有数の横穴式石室を持つ今里大塚古墳が築かれるのを最後として大型古墳の造営を終える。

過去の調査　1967年からその翌年にかけて、京都府教育委員会が主体となって向日丘陵周辺の遺跡分布調査が行われた。その一環として井ノ内車塚古墳も測量調査が行われ、墳丘の全長が38mであること、後円部と前方部に大規模な撹乱が確認された。(2)

1997年に大阪大学を主体として墳丘の測量調査が行われた。(3)その結果、測量図および地表観察の結果から墳長37m、後円径18mの前方後円墳であること、墳丘には1967年の調査以後目立った改変が加えられていないことが判明した（第30図）。　（藤井章徳）



第30図　墳丘測量図（1/250）



第31図　トレンチ配置図

3　墳丘の調査

（1）後円部北トレンチ（第32図）

後円部北トレンチは、後円部の墳端を確認し、古墳の全長を明らかにすることを主たる目的として、墳丘主軸に沿って設置したトレンチである。

墳頂で約5～10cm、それより北側では表土および流土を約50cm掘り下げたところで、黒褐色の土と黄褐色の土が交互に堆積する層位を検出した。その下層からは古墳に伴う遺物が出土しなかったことから、これを墳丘面と判断した。墳丘面は約32°の傾斜をもち、残存する墳頂の最高所の標高は51.08mである。

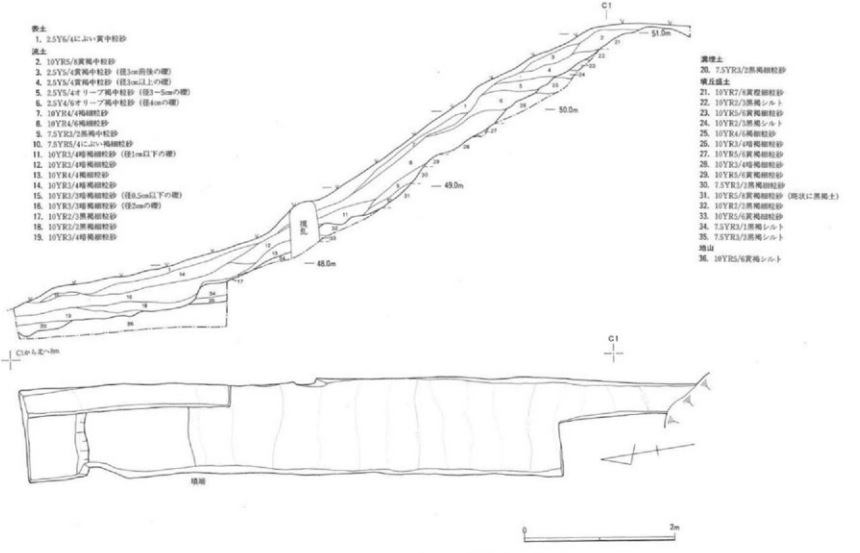
トレンチの北側では、水平にのびる黒褐色の地山面が確認された。トレンチの北端より約2.3mの地点で、地山面から盛土が上方に傾斜しはじめる変換点を検出し、これを墳端と判断した。墳端のレベルは標高約47.4mである。また、墳端より0.8mの地点から北側に落ち込みが認められ、この落ち込みの南肩は墳裾に平行することを確認した。前方部南トレンチでも同様に、溝状の落ち込みがみられることから、これらは周溝の一部である可能性が考えられる。ただし、この落ち込みの北側の肩は土地の境界の都合上、確認できなかった。

墳丘は、黒褐色と黄褐色の細粒砂を交互に積み上げて構築されており、全体を大きく3つの単位に分けることができる。下段の黒褐色土層を主体として黄褐色土層を挟み、礫をほとんど含まない単位、中段の黄褐色土層を主体として暗褐色土層を含み、直径1～3cmの礫を含む単位、上段の直径1～2cmの礫を含む黄褐色土層と礫を含まず均質な黒褐色土層を交互に重ねる単位である。下段と中段の境界は標高約49.3m、中段と上段の境界は50.4mのレベルで、それぞれ単位が変わっている。

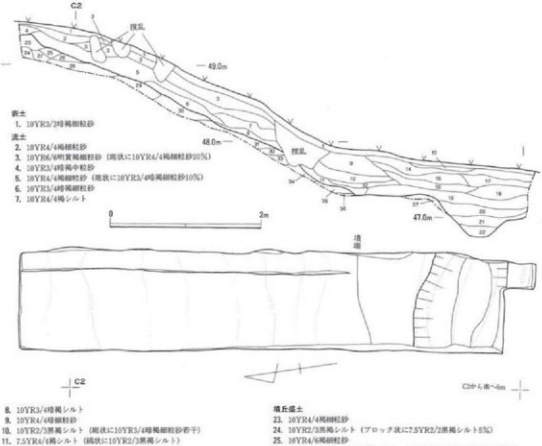
墳丘面の残存状況は比較的良好であったが、段築は認められず葺石も検出されなかった。遺物は、形象埴輪を含む埴輪片と須恵器片1点を検出したが、いずれも原位置をとどめておらず、主に墳裾の流土より出土した。（長友朋子）

（2）前方部南トレンチ（第33図）

前方部南トレンチは前方部側の墳端を検出することを目的として設定した。主軸に沿って南北6m・東西1.8mのトレンチを設定したが、トレンチ南端で検出された溝状遺構の幅を確定するためにトレンチ東南隅から長さ0.3m・幅0.35mにわたって拡張を行った。トレンチを掘り下げたと



第32図　後円部北トレンチ平面図・土層断面図（1/50）



第33図　前方部南トレンチ平面図・土層平面図（1/50）

ころ、現地表下30～40cmで前方部撹乱部調査区で確認された交互の堆積がみられる面に達した。この面より下層では埴輪など古墳に伴う遺物を含まないことから墳丘盛土であると判断し、この面の検出を行った。墳丘盛土は下から暗褐細粒砂、黒褐細粒砂、暗褐細粒砂、黒褐シルト、にぶい黄褐色細粒砂、褐色細粒砂の順に積み上げている状況が観察された。墳丘盛土を検出した結果、残存する前方部墳頂の高さは標高49.3mであった。また、トレンチ南端から1.2m・標高47.3mの高さで地山を検出した。この地点から南側では平坦な地山面が続くことから、この盛土と地山の変換点が墳端であると考えられる。その墳端から南へ続く平坦面は地山を削って形成されており、幅１ｍを測る。さらにその南側には地山を掘り込む幅約１ｍ、墳丘裾平坦面からの深さ約0.5mの溝状遺構が存在している。この溝状遺構の肩のラインは前方部の墳端ラインと厳密には平行しないが、埋土中には埴輪しか含まれておらず、後円部北トレンチでも同様の遺構が検出されていることなどから古墳に伴う周溝である可能性が高い。

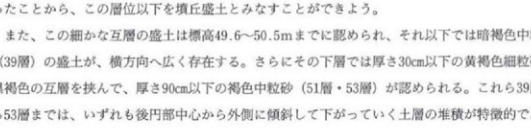
遺物はすべて表土および流土中からの出土で原位置をとどめていない。埴輪片と須恵器片のほか、陶磁器片や古銭が出土した。埴輪片は、形が判明するものとしては普通円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。須恵器のうち坏蓋片は埴輪とともに当古墳の年代を考える上で重要な指標となりうるものである。（忽那敬三）

（3）後円部撹乱部調査区北壁面（第34図）

本古墳の後円部は盗掘あるいは土取りによって大きく削られており、後円部撹乱北側では高さ2.5mほどの崖面がみられた。そこで、後円部における盛土の状況と埋葬施設に関する手がかりを得ることを目的として、墳丘主軸より西側に位置する後円部撹乱部崖壁面の清掃を行い、後円部撹乱部調査区北壁面として土層の観察を行った。

まず、現状で残存している墳丘表面から10～35cm下方において、黄褐色と黒褐色の細粒砂あるいはシルトで構成された厚さ5～20cmの単位が、交互に水平方向で堆積している状況が確認された。このような堆積状況と、これらの層位において埴輪など古墳に伴う遺物が全く認められなかったことから、この層位以下を墳丘盛土とみなすことができよう。

また、この細かな互層の盛土は標高49.6～50.5mまでに認められ、それ以下では暗褐色中粒砂（39層）の盛土が、横方向へ広く存在する。さらにその下層では厚さ30cm以下の黄褐色細粒砂と黒褐色の互層を挟んで、厚さ90cm以下の褐色中粒砂（51層・53層）が認められる。これら39層から53層までは、いずれも後円部中心から外側に傾斜して下がっていく土層の堆積が特徴的である。



表土
1. 10YR4/6褐中粒砂
墳丘盛土
2. 2.5Y5/6黒褐シルト
3. 7.5YR3/2黒褐細粒砂
4. 10YR5/6黄褐シルト
5. 10YR3/2黒褐中粒砂（現状に2.5YR4/6明褐シルト30%）
6. 10YR5/6黄褐シルト（ラミナ状に10YR3/2細粒砂）
7. 10YR3/3黒褐シルト
8. 10YR5/6黄褐シルト
9. 10YR3/3黒褐細粒砂（現状に10YR4/4褐細粒砂30%）
10. 10YR3/3黒褐細粒砂（現状に10YR4/6褐細粒砂10%）
11. 10YR4/4褐中粒砂（10YR3/4褐中粒砂）
12. 7.5YR4/4褐細粒砂
13. 10YR2/3黒褐細粒砂
14. 10YR3/4褐中粒砂
15. 10YR4/4褐中粒砂（機械状に2.5YR5/6明褐シルト20%）
16. 10YR3/3褐細粒砂
17. 10YR6/8黄褐細粒砂（10YR3/4褐中粒砂25%、ブロック状に10YR8/1灰白シルト25%）
18. 10YR2/3黒褐細粒砂
19. 10YR5/8黄褐細粒砂（ラミナ状に7.5YR4/4褐細粒砂）
20. 7.5YR3/1黒褐細粒砂
21. 7.5YR3/3黒褐細粒砂（10YR4/4褐細粒砂30%、10YR6/6明褐細粒砂30%）
22. 7.5YR3/3黒褐細粒砂（現状に10YR7/6明褐細粒砂5%）
23. 10YR5/6黄褐細粒砂
24. 7.5YR4/1黒褐中粒砂
25. 7.5YR7/1黒褐細粒砂
26. 2.5YR6/6明褐細粒砂
27. 2.5YR6/6明黄褐細粒砂（若干の礫）
28. 10YR3/3褐黒中粒砂
29. 7.5YR2/1黒褐細粒砂
30. 10YR5/6黄褐中粒砂
31. 7.5YR3/2黒褐細粒砂（現状に10YR7/6明褐細粒砂5%）
32. 2.5YR6/6明黄褐細粒砂
33. 10YR2/2黒褐シルト
34. 10YR5/6黄褐中粒砂
35. 7.5YR3/3褐褐細粒砂
36. 10YR3/4褐褐中粒砂（現状に10YR4/4褐中粒砂40%）
37. 7.5YR3/2黒褐細粒砂
38. 7.5YR3/2黒褐細粒砂
39. 7.5YR3/4褐褐中粒砂（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト10%）
40. 7.5YR5/6明黄褐細粒砂
41. 7.5YR3/3褐褐シルト
42. 7.5YR3/1黒褐シルト
43. 7.5YR3/1黒褐シルト
44. 10YR2/2黒褐シルト（機械状に10YR5/6黄褐シルト20%）
45. 10YR4/6褐細粒砂
46. 7.5YR3/2黒褐細粒砂（ラミナ状に10YR4/4褐細粒砂）
47. 10YR2/2黒褐細粒砂
48. 10YR2/2黒褐細粒砂（10YR2/1黒褐細粒砂50%）
49. 10YR2/2黒褐細粒砂（7.5YR2/1黒褐細粒砂50%）
50. 10YR2/2黒褐細粒砂（10YR2/1黒褐細粒砂50%）
51. 10YR4/4褐中粒砂（現状に2.5Y6/6明黄褐シルト5%）
52. 7.5YR2/1黒シルト
53. 10YR4/4褐中粒砂（現状に2.5Y6/6明黄褐シルト15%）
54. 10YR3/3～2/3黒褐細粒砂（現状に10YR4/4褐中粒砂）
55. 10YR4/4褐中粒砂
56. 10YR2/3黒褐細粒砂（10YR4/4褐中粒若干）
57. 10YR4/4褐細粒砂
58. 10YR5/6黄褐細粒砂（2.5Y6/4にぶい黄褐細粒砂40%）
59. 2.5Y5/4黄褐中粒砂

第34図　後円部撹乱部調査区土層図（1/50）

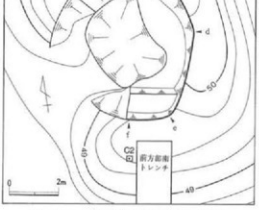
さらに、その下層は黒褐色細粒砂（54層）で構成されており、標高49.7～49.5m付近で水平を志向した面が形成されている。なお、それ以下の状況については本調査区における崖面の観察では不明である。

以上の土層観察の結果、35層と54層の間、標高50.0m前後において、後円部中心から外縁へ傾く盛土単位が形成されていることが判明した。そして、その下層では厚さ30cm以下の大きな単位の盛土が、その上層では厚さ5～20cmの細かな互層の盛土が、それぞれ認められたのである。さらに土層の状況として興味深いのは、盛土の一部に幅40cm前後、厚さ10～25cm程度の非常に均質な黒褐色のシルトあるいは細粒砂のブロックが存在する点である（図版18（1）・（2））。これらの状況は大阪府羽曳野市蔵塚古墳などで認められた土嚢と指摘される土層単位と類似している。[4] ただし、このような土層単位が密集していないという点では、蔵塚例などと異なっており、この土層単位を土嚢として認定するかについては、今後の検討課題としたい。本調査区における観察からは、埋葬施設に関する直接的な情報を得ることはできなかった。（寺前直人）

（4）前方部撹乱部調査区（第36図）

本調査区では、墳丘構築構造を解明するために撹乱の壁面を清掃し、地山面のレベルを確認するため北側壁面の下部にサブトレンチを設定した。撹乱は平面形で円形を呈しており、墳丘主軸に直交する情報と平行する情報が連続する壁面に含まれている（第35図）。また、南側の壁面は調査着手時から撹乱の壁が階段状になっていたため、その段を残して調査を行った。そのため南側の壁面図は、段を挟んだ上下の壁面を併せて正面からの見通しで表現した。

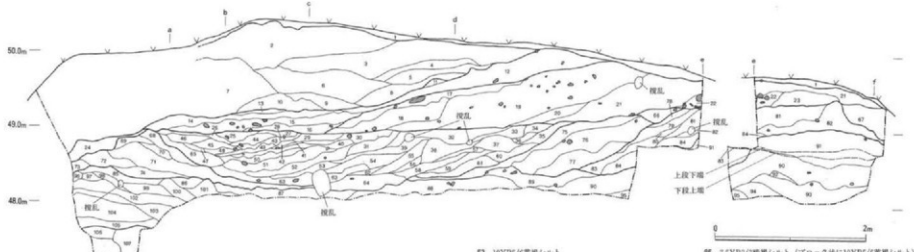
調査の結果、サブトレンチの最下層からは締まりの良い黄褐色シルトの層が検出されたが、これは地山と思われる。そのレベルは標高47m前後である。その上面には50cmほどの厚さで締まりのない黒褐色シルトの層（106層～109層）が堆積している。この層の上面に細粒砂からシルトによって構成される、黄褐色土と黒褐色土の水平層がそれぞれ厚さ30cmほどの厚みで交互に堆積している状況が伺える。現時点ではこれらの層から上を明確な盛土としてとらえている。



第35図　前方部撹乱部調査区平面図

その上面には、黒褐色の細粒砂を中心とした土が山形に堆積している（68層～84層）。このような堆積が北側の壁面と東側の壁面に見られることから、平面形で円形もしくは馬蹄形に堤防状の盛土が行われていたと推測される。こうした盛土の類例として、近隣の物集女車塚古墳の墳丘断面の調査でも凹面をなす土層の堆積が確認されている。[5] この凹面を成した堤状の土層の内側には、黄褐色土と黒褐色土の細粒砂を中心とした厚さ10cmほどの層（25層～65層）が上面をほぼ水平にして交互に堆積する。

ここまでの堆積によって形成された水平面のさらに上には、前方部側から後円部側に傾斜する土層が



表土

1. 7.5YR3/2黒褐中粒砂

壌土盛土

2. 7.5YR4/2灰褐中粒砂（混状に10YR5/6黄褐細粒砂、径5cm前後の礫70%）
3. 5YR4/6赤褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
4. 5YR5/6明褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
5. 7.5YR5/4明褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
6. 7.5YR4/3～4/4褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
7. 7.5YR4/3褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
8. 7.5YR2/3褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
9. 7.5YR4/1黒褐中粒砂（径5cm前後の礫70%、7.5YR5/4黄褐中粒砂40%）
10. 7.5YR4/3褐中粒砂（径5cm前後の礫70%）
11. 10YR5/6黄褐細粒砂（混状に10YR3/2黒褐細粒砂10%）
12. 10YR3/2黒褐細粒砂（ブロック状に10YR5/6黄褐細粒砂15%）
13. 10YR5/6黄褐シルト
14. 7.5YR2/2黒褐中粒砂（混状に10YR5/6黄褐細粒砂20%）
15. 10YR6/6明黄褐シルト
16. 10YR5/6黄褐細粒砂（混状に10YR3/2黒褐中粒砂40%）
17. 10YR5/2黒褐細粒砂（混状に10YR5/6黄褐細粒砂40%）
18. 10YR5/4にぶい黄褐中粒砂（混状に10YR3/2黒褐中粒砂40%）
19. 10YR5/6黄褐中粒砂
20. 10YR5/6黄褐シルト（混状に10YR3/2黒褐シルト40%）
21. 10YR5/6黄褐中粒砂（混状に10YR4/2灰黄褐中粒砂20%）
22. 10YR3/2黒褐細粒砂
23. 10YR5/6黄褐細粒砂（混状に10YR3/2黒褐細粒砂40%）
24. 10YR5/6黄褐シルト
25. 10YR5/4明褐シルト（混状に10YR5/6黄褐シルト30%）
26. 7.5YR3/4明褐シルト（混状に10YR2/2黒褐シルト30%）
27. 7.5YR3/4明褐粘質土
28. 10YR5/6黄褐粘質土
29. 7.5YR2/2黒褐シルト（混状に7.5YR5/3黄褐シルト30%）
30. 10YR5/6黄褐シルト
31. 7.5YR2/2黒褐シルト
32. 7.5YR2/2黒褐シルト（混状に7.5YR4/4褐シルト30%）
33. 7.5YR2/2黒褐シルト
34. 7.5YR4/4褐シルト（混状に10YR5/6黄褐シルト30%）
35. 10YR5/6黄褐シルト
36. 7.5YR2/2黒褐シルト
37. 10YR5/4にぶい黄褐シルト（混状に10YR4/2灰黄褐シルト5%）
38. 7.5YR4/2黒褐シルト
39. 10YR5/6黄褐シルト
40. 7.5YR2/2黒褐シルト
41. 10YR5/6黄褐シルト
42. 7.5YR2/2黒褐シルト
43. 7.5YR2/2黒褐シルト
44. 7.5YR3/4黒褐シルト
45. 10YR5/6黄褐シルト（混状に10YR3/2黒褐シルト10%）
46. 7.5YR2/2黒褐シルト（混状に7.5YR4/4黒褐シルト5%）
47. 10YR5/6黄褐シルト
48. 7.5YR2/2黒褐シルト
49. 10YR5/6黄褐シルト
50. 7.5YR5/6黄褐シルト（斑状に7.5YR3/4暗褐シルト40%）
51. 7.5YR3/4暗褐シルト（斑状に7.5YR4/4褐シルト40%）
52. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6シルト30%）
53. 10YR5/6黄褐シルト
54. 7.5YR3/3暗褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト10%）
55. 10YR5/6黄褐シルト
56. 7.5YR3/3暗褐シルト
57. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト20%）
58. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト10%）
59. 10YR5/6黄褐シルト
60. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト10%）
61. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に10YR4/3灰黄褐シルト40%）
62. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に7.5YR2/2黒褐シルト30%）
63. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に10YR3/2黒褐シルト30%）
64. 10YR4/3にぶい黄褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト20%、ブロック状に10YR2/2黒褐シルト20%）
65. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に7.5YR2/3黒褐シルト5%）
66. 7.5YR4/4褐細粒砂（斑状に10YR3/2黒褐細粒砂20%）
67. 10YR5/6黄褐細粒砂
68. 7.5YR2/3黒褐シルト（ブロック状に7.5YR5/3暗褐シルト5%）
69. 10YR2/3黒褐シルト（斑状に7.5YR2/3黒シルト40%）
70. 7.5YR2/2黒褐シルト
71. 7.5YR3/3暗褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト20%）
72. 7.5YR3/3暗褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト5%）
73. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR4/3灰黄褐シルト40%）
74. 7.5YR2/2黒褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト5%）
75. 7.5YR2/2黒褐シルト
76. 10YR4/2灰黄褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト5%）
77. 7.5YR2/2黒褐シルト
78. 7.5YR3/3暗褐シルト
79. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に7.5YR4/3褐シルト10%）
80. 10YR5/6黄褐シルト（ブロック状に7.5YR2/2黒褐シルト10%）
81. 7.5YR3/3黒褐シルト（斑状に10YR4/4褐シルト30%）
82. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に10YR3/3暗褐シルト30%）
83. 10YR4/2灰黄褐シルト（斑状に10YR4/4褐シルト10%）
84. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト10%）
85. 7.5YR2/3暗褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト）
86. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に7.5YR4/6赤褐シルト40%）
87. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に7.5YR2/2黒褐シルト40%）
88. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト20%）
89. 7.5YR3/3暗褐シルト（斑状に10YR4/6褐シルト20%）
90. 10YR4/3にぶい黄褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト40%）
91. 7.5YR2/2黒褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト20%）
92. 10YR5/6黄褐シルト（ブロック状に7.5YR2/2黒褐シルト20%）
93. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に10YR3/3暗褐シルト40%）
94. 7.5YR3/3暗褐シルト
95. 7.5YR2/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト40%）
96. 7.5YR3/4暗褐シルト（7.5YR2/2黒褐シルト20%）
97. 7.5YR2/2黒褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト20%）
98. 10YR3/2黒褐シルト（斑状に10YR5/6黄褐シルト40%）
99. 7.5YR4/4褐シルト（ブロック状に10YR5/6黄褐シルト10%、斑状に7.5YR2/3褐色シルト30%）
100. 10YR5/6黄褐シルト
101. 7.5YR2/2黒褐シルト
102. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に、10YR4/2黄褐シルト30%）
103. 7.5YR2/2黒褐シルト（ブロック状に7.5YR4/2灰褐シルト5%）
104. 10YR5/6黄褐シルト（斑状に7.5YR3/3暗褐シルト10%）
105. 7.5YR2/2黒褐シルト

壌土盛土or地山

106. 7.5YR5/4明褐シルト
107. 7.5YR2/2黒褐シルト
108. 7.5YR3/2黒褐シルト（斑状に7.5YR4/3褐シルト30%）
109. 7.5YR2/2黒褐シルト

地山

110. 10YR5/6黄褐シルト

第36図　前方部撹乱部調査区土層図（1/50）

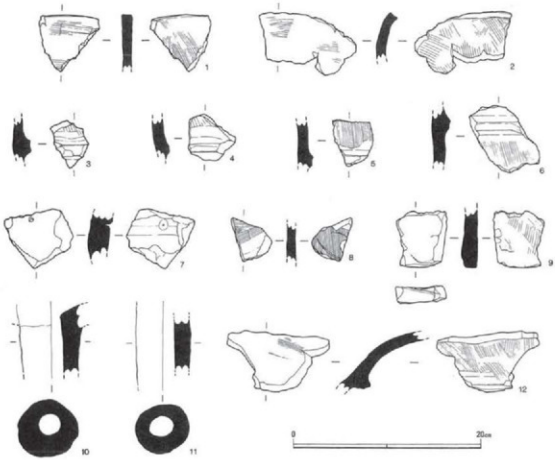
観察できる。それらの層は、下から順に、黄褐色の細粒砂から中粒砂を中心とした径3㎝前後の大きめの礫を含む層（17層～23層）、続いて黒褐色の細粒砂から中粒砂を中心とした同じく大きめの礫を含む層（11層～16層）が堆積する。両者ともに、厚さ40㎝ほどの単位を含み、それまでの堆積と比べて厚い土層の単位から構成されている。この上面には灰褐色から暗褐色の中粒砂を中心とした層（2層～10層）が厚さ50㎝程の大きな単位を中心として堆積している。この土層には直径3.5㎝前後の礫が非常に多く含まれ、これまでの土層と様相が大いに異なっていることから撹乱土である可能性も残るが、遺物が含まれないことなどからこの層も盛土と解釈する。

（藤井）

4　出土遺物

埴輪（第37図）1・5・6・8・9・12は前方部南トレンチから、それ以外は後円部北トレンチから出土している。すべて流出土からの出土である。須恵質の埴輪片や線刻を持つ埴輪片は前方部から、形象埴輪は後円部から出土している。このことは、埴輪配列に関して一定の傾向を示している可能性も考えられる。

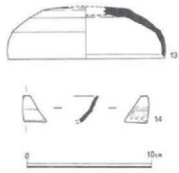
1～6・8・9・12は円筒埴輪、7・10・11は形象埴輪である。1・2・12は口縁部、3～6は突帯部分、8は線刻を持つ胴部、9は底部である。1と5は須恵質のものであるが、土師質の



第37図　埴輪（1/4）

埴輪片427点に対して須恵質の埴輪片は5点と、全体的にはわずかである。

1は須恵質のもので、歪んでいるため口縁部の外反角度は不明である。2は大きく外反する口縁部である。いずれも口縁部内面はヨコハケ後ナデ調整をし、外面はタテハケを施す。1・2の口縁端部は明瞭な面を持つ。12は朝顔形埴輪の口縁部である。3～6の突帯の断面は扁平な台形かM字に近い形態で、突出度は小さい。外面はタテハケを施した後突帯を貼り付け、一度または二度ナデを施す。3以外の埴輪には2次調整は認められなかった。



第38図　須恵器（1/3）

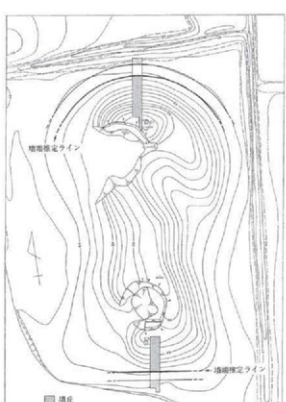
内面は縦方向に指ナデを施す。8は線刻の施された胴部片である。沈線幅は1㎜以下で細く浅い。他のものと比べて、この埴輪片の内外面のハケ調整は細かく精緻で、焼成も良好である。9は外面をタテハケをした後、右下から左上方向にナデ調整が施される。内面はナデ調整で、粘土帯を接合した痕跡が底面で観察される。7・10・11は形象埴輪である。7は水平方向に強いナデ調整が施されている。ナデ調整の後に外面から直径2㎜以下の工具で刺突され、貫通した穴がある。下方にいくほど厚さが薄くなり、外反する。10・11は動物埴輪の脚部と考えられる。10は、側面に胴部との接合痕が観察できる。10・11はともに中空で筒状を呈しており、粘土紐巻き上げの痕跡はみられない。

出土した埴輪にはいずれも黒斑が認められず、ほとんどの個体に2次調整はなく、乙訓地域出土の埴輪の中では、最も新しい時期に属すと考えられる。

須恵器（第38図）　13は前方部南トレンチから、14は後円部北トレンチから出土した。13は、復元口径12.5cm、復元高4.1cmの杯蓋である。天井部と体部の境界にゆるい稜をもち、口縁端部内面には段をもつ。外面は反時計回りの方向にケズリ調整が施される。14は無蓋高杯の口縁部である。体部からいったん屈曲して、やや直線的に外上方にひらく。口縁部外面に陵をもち、刺突文が施される。いずれも6世紀前半の時期に比定される。　（長友）

5　ま と め

今回の調査は、井ノ内車塚古墳で行われた初めての発掘調査である。後円部ならびに前方部の主軸に沿って設けたトレンチでは墳丘の裾部を確認し、全長が36mであることが明らかになった。また、後円部・前方部ともに裾の外側に溝状の遺構が確認された。これらの溝が古墳の全周を巡っているかどうかは不明であるが、少なくとも墳丘の内部と外部を区画する溝である可能性が高い。外表施設としては、葺石は認められなかったが、両トレンチから埴輪片が少量出土していることから、墳丘上に埴輪が樹立されていたことが判明した。この埴輪とともに須恵器片も出土し、古墳が6世紀前半に位置する可能性が強くなった。また、後円部撹乱部調査区と前方部撹乱部調査区では、撹乱部の壁面を清掃し、当古墳の大部分が盛土で構築されていることと、後円部では埋葬施設が失われている可能性が高いことなどを確認した。



第39図　墳丘復原図

このように数多くの新たな知見を得ることができたが、車塚古墳の築造時期が6世紀前半に位置づけられることが明らかになったことで、南東400mに位置する井ノ内稲荷塚古墳との関係が問題となろう。これまで、車塚古墳は稲荷塚古墳に後続し、稲荷塚古墳と同一の首長系譜を構成していると考えられてきた。しかし、今回の調査により、車塚古墳は井ノ内稲荷塚古墳と時期的に併行、あるいは埴輪の存在をより古相の特徴と考えれば、わずかに先行する可能性も出てきたのである。これまで考えられてきた長岡京市域における古墳時代後期の首長系譜の枠組みを再検討する必要が生じてきたのである。

車塚古墳と稲荷塚古墳の相違点をあげれば次のようになろう。規模の点からいえば、車塚古墳と稲荷塚古墳では稲荷塚がわずかに大きい。埋葬施設は、車塚古墳が不明な点が多いものの木棺直葬が考えられていることに対し、稲荷塚古墳は後円部に横穴式石室を有する。この点でも稲荷塚古墳の方が若干ではあるが優位な立場にあるといえる。その一方で、車塚に埴輪が存在するが、稲荷塚古墳には認められないという違いがある。

両古墳が同時期と考えた場合、同じような規模の古墳が同一系譜に併存する可能性はもちろん考えられるが、厳密には別の小系譜としてとらえる余地もあろう。その一方で、車塚古墳が稲荷塚古墳に先行する可能性もある。ただ、車塚古墳の細かな築造時期を決定し、首長系譜の枠組みを検討するには、車塚古墳に関するさらなる情報が必要である。今後の調査に期待したい。また、400m隔たった両古墳の間には井ノ内古墳群という小方墳から構成される古墳群が存在する。これらの古墳の資料をも含めて、首長系譜の問題を整理していく必要があろう。　（清家）

注1）都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」（『待兼山論叢』史学篇第22号　大阪大学文学部　1988年）

2）堤　圭三郎、高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財調査概報』京都府教育委員会　1968年）

3）福永伸哉、清家章ほか「井ノ内稲荷塚古墳第5次調査概要」（都出比呂志編『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』大阪大学文学部　1999年）

4）江浦　洋ほか『蔵塚古墳』㈱大阪府文化財調査研究センター　1998年

5）秋山浩三・山中章『物集女車塚古墳』向日市教育委員会　1988年

第5章　長岡京跡右京第653次（7ANIAE-12地区）調査概要

―長岡京跡右京三条三坊三町、今里遺跡―

1　はじめに

1　本調査は1999年10月4日～1999年11月26日まで、長岡京市今里四丁目210において実施した長岡京跡右京三条三坊三町および今里遺跡の発掘調査に関するものである。

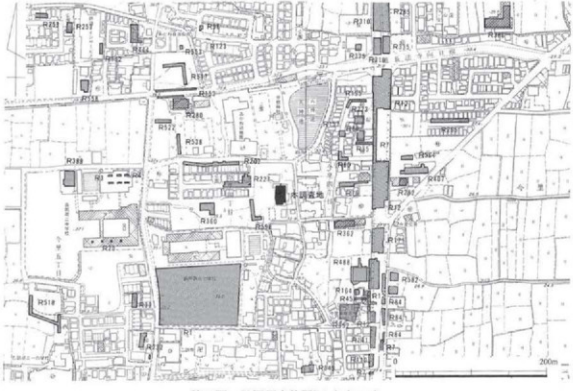
2　本調査は、調査地周辺で多数確認されている今里遺跡に関する資料を得ることを主な目的として実施したものである。

3　調査は、平成11年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査係長　小田桐　淳、嘱託調査員　小畑佳子が担当した。

4　調査の実施に当たり、土地所有者の方には水道水の供給や写真撮影などに関して数々のご援助・ご協力を賜った。

5　須恵器の所見に関しては、奈良大学文学部講師　植野浩三氏より種々のご教示を賜った。

6　本報告の執筆・編集は小畑が行った。



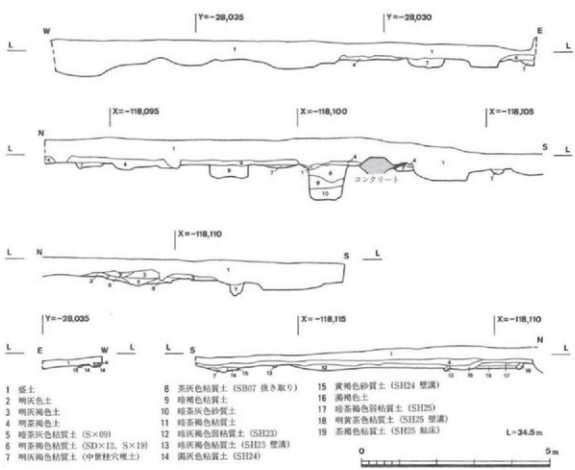
第40図　発掘調査位置図（1/5000）

2　調査経過

調査地は、阪急西向日駅の西約1㎞、長岡第三小学校北東の住宅地内に位置している。当地は、地形分類上では西から東に傾斜する低位段丘の東端の位置に立地し、調査地のすぐ東側は氾濫原との境になっており、高さ約2ｍ程の段丘崖が南北方向に延びている。周辺には南に白鳳期創建の乙訓寺、北には角宮神社（伝乙訓坐火雷神社）など郡名を冠する寺社が所在しており、乙訓地域の中心地ともいうべき所にあたる。

本調査地は長岡京跡の条坊復原案では、長岡京跡右京三条三坊三町にあたる。周辺では当地の西約60mで行われた右京第202・227次調査[注1・2]において、長岡京期の遺構は未確認であるものの、弥生時代後期の竪穴住居や古墳時代後期の竪穴住居、掘立柱建物など今里遺跡に関する遺構が数多く確認されている。また北東約250mで行われた右京第285次調査[3]では、奈良時代の井戸や真東西方向の掘立柱建物が検出され、同時に「園宅」「園司」と書かれた墨書土器などが出土していることから、朝廷の菜園である「乙訓園」の存在が想定されているところである。以上を踏まえ、本調査においてもこれらに関連する成果が期待された。

調査では最初、調査地内で最も遺存状態が良好であることが推定された北西部分に約120㎡の



第41図　調査地土層図（1/100）

トレンチを設定し、10月４日より開始した。その結果、掘立柱建物の西辺にあたると思われる大型の柱列が確認されたため、全容を明らかにするべく東と南に拡張して調査を続行した。さらに確認のため周辺へも可能な限りトレンチを延長した。なお、調査総面積は309㎡である。

３　検出遺構

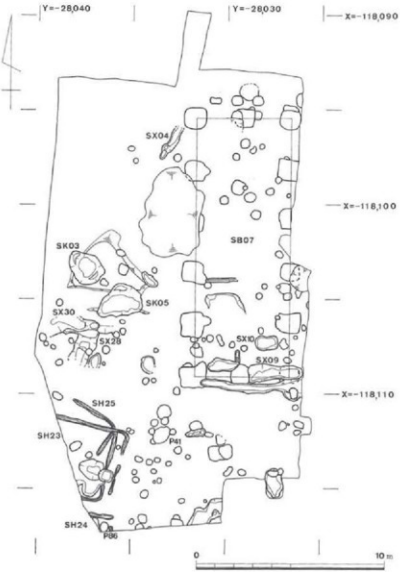
調査地における基本層序（第41図）は、上から盛土（第１層）、明褐色土（第２層）、明灰褐色土（第３層）、明茶褐色土（第４層）の順で堆積し、現地表下約0.8mで地山層に至った。第２層は調査地南半で確認した近世溝の埋土である。第３層は調査地東南で部分的に認められるもので、土師器、瓦器など中世の遺物を包含する堆積層である。第４層は調査地全体で確認された厚さが約0.1m程ある粘性の強い堆積層で、古墳時代から奈良時代にかけての遺物包含層である。地山層は基本的に黄褐色粘質土であるが、調査地北半では造成に伴う削平が著しく下層の黄褐色砂礫が露呈している状況であった。

遺構は、すべて地山面上において検出された。検出面での標高は34.3mである。検出された遺構には、鎌倉時代の土壙墓２基、奈良時代の掘立柱建物、土坑、落ち込み状遺構、古墳時代の竪穴住居３棟などがある。以下、時代の新しいものから順に報告したい。

［鎌倉時代の遺構］

土壙墓ＳＸ09（第43図）

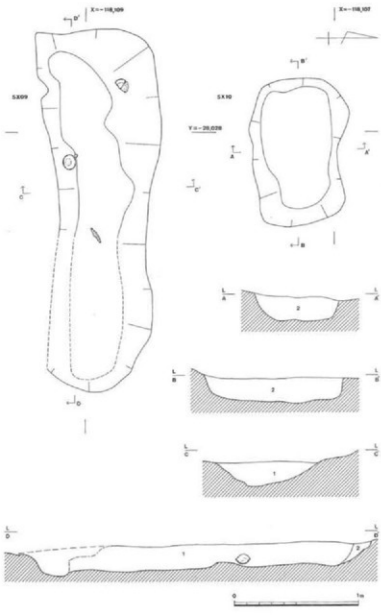
調査地東南で検出された東西方向を主軸とする土壙墓である。全長は掘形東端部確認のための拡張を行った結果、2.9mであることが明らかにされた。平面不整長方形を呈し、南北0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は２層あり暗茶灰色粘質土（第１層）、暗灰褐色粘質土（第２層）の順で堆積



第42図　検出遺構図（1/200）

している。このうち第２層は堆積状況などから棺の裏込めになる可能性が高い。遺物は第１層のみにみられる。第１層上面からは完形ないしそれに近い瓦器椀３個体、底面からは瓦器椀２個体と鉄鏃が、いずれも置かれた状態で出土していることから、前者は墓壙を埋め戻した上に、後者は棺内に置かれた副葬品と察せられる。遺構の時期は出土遺物より鎌倉時代後半に比定されるものと考えられる。

土壙墓ＳＸ10（第43図）　SX09の北側で検出された平面隅円長方形を呈するもので、SX09と同一の主軸方向をなす遺構である。現状で東西1.2m、南北0.7m、深さ0.2mである。埋土は暗灰褐色粘質土１層で、底面はほぼ平坦に揃えられていた。遺物は、埋土より土師器、瓦器の小片が数点出土したのみで副葬品などはなかったが、SX09の北隣に位置し、同一主軸方向であること、また掘形の形状などから土壙墓の可能性が高いものと考えられる。



第43図　土壙墓SX09・10実測図（1/30）

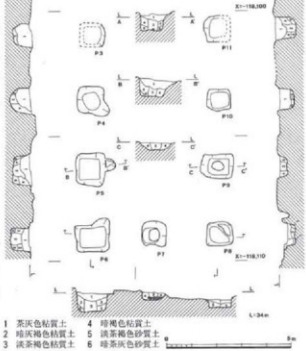
［奈良時代の遺構］

掘立柱建物ＳＢ07（第44図）　当初設定していたトレンチの東端で建物西側の一部が検出されたことにより、東側へ拡張し、南北５間、東西２間の南北棟建物であることが明らかになった。建物の柱間は梁間2.4m等間、桁行2.7m等間を測る。柱掘形は平面隅円方形で、一辺１～1.3m、深さは0.3～0.4mの浅いものと、0.8～１mの深いものがありそれぞれが交互に配列されている状況が見られた。また、隅柱の掘形は他に比べ平面・深さともに規模が大きい傾向がある。柱穴の中には抜き取り痕が確認できるものもあり、それらはおおむね東側に向かって抜き取られている。柱の太さは平・断面の観察から直径0.4m前後と推定される。他に、柱穴の中には柱痕跡直下に拳大の礫を敷くものがある（Ｐ２・７・14）。この礫は、隙間に充塡さ

れている粘土が他の埋土に比べ非常に堅固であったことから、柱の沈下を防ぐための地固めとして施されたものと思われる。柱穴出土遺物には、須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋をはじめ、「三」と墨書された須恵器片、縄目タタキを施した丸瓦、鉄製品などが出土しており、土器の特徴などから奈良時代に位置づけられると考えられる。

土坑ＳＫ03（第45図）　調査地西半のほぼ中央で検出された、平面不整楕円形の土坑である。規模は長辺約２m、短辺約1.5m、深さ0.3～0.4mを測る。埋土は、上層に暗茶褐色粘質土、下層は質感的には地山と大差ない土層である濁黄褐色粘質土が堆積していた。遺物は両層で確認したが、特に上層からまとまって出土した。そのうち須恵器杯Ｂ蓋は形態から奈良時代の所産であるものと考えられる。他には、陶邑編年 TK23～47型式に並行する須恵器蓋片や弥生時代後期～古墳時代前期にかけての甕底部などがあるが、いずれも混入品と思われる。

土坑ＳＫ05（第45図）　SK03の南隣で確認された平面不整楕円形を呈する土坑で、第４層直下を検出面とする遺構である。規模は東西約2.4m、南北約1.7m、深さ0.4～0.6mを測る。埋土はSK03と同様の堆積状況が確認された。埋土からは古墳時代中期～後期にかけての遺物が数点出土するのみであった。しかし、当遺構の検出状況がSK03と類似す



第44図　掘立柱建物 SB07実測図（1/150）

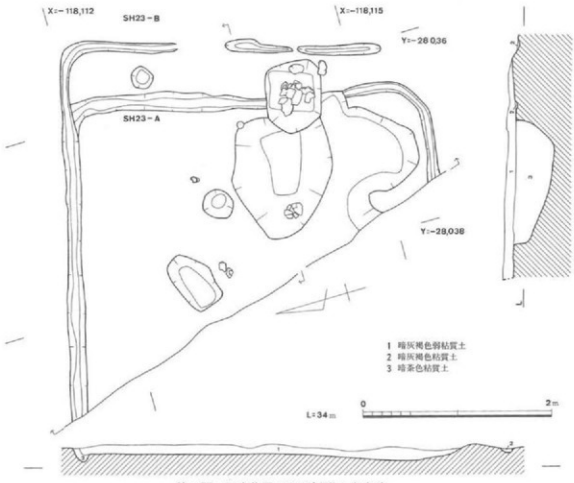
第45図　土坑 SK03・05実測図（1/50）

ることから、これらが混入品とも考えられるため、SK03と同時期で、奈良時代の遺構である可能性が高いものと考えられる。

落ち込み状遺構ＳＸ28・30（第42図）　調査地西半、SH25の北側で検出された。当遺構付近は調査地内でも撹乱の激しい部分であるため、平面形態、規模、切り合い関係などは判然としなかった。遺構内には暗褐色の粘土が堆積し、深さは現状で約0.3mを測る。埋土には古墳時代～奈良時代の遺物が多数包含されていた。主なものとして陶邑編年 TK208型式並行期の須恵器杯身や、奈良時代の杯Ｂ蓋などが挙げられる。

［古墳時代の遺構］

竪穴住居ＳＨ23（第46図）　調査地南西部で検出された方形の竪穴住居で、振れ角は西で北へ14°を測る。調査では遺構の東半のみが確認されたため全容はわからないが、東辺を東へ拡張した痕跡が認められる。住居に伴う施設には、壁溝と貯蔵穴と考えられる土坑２基、および柱穴３基が検出された。柱穴のうち２基は位置的に判断して主柱穴になる可能性は低い。さらに貯蔵穴２基は切り合って検出されており、その状況から拡張に伴って既存のものを廃棄した後、また新たに構築しているものと考えられる。よって新しいものをSK31、古いものをSK32とした（第47図）。加えて住居北辺を規定する壁溝は住居が東へ拡張された後も使用されていることが切り合い関係より明らかにされた。



第46図　竪穴住居 SH23実測図（1/40）

まず拡張以前の住居であるSH23-Aは、南北約4m、東西約3.2m以上を測る。住居内の土層は木の根による攪拌が著しかったため、主柱穴は確認されなかった。これに伴う貯蔵穴SK32は東端をSK31によって切られているが、断面などから東西1.3m、南北1m、深さ0.4mであることがわかった。埋土は暗茶色粘質土1層で、土師器の細片が僅かに出土したのみである。

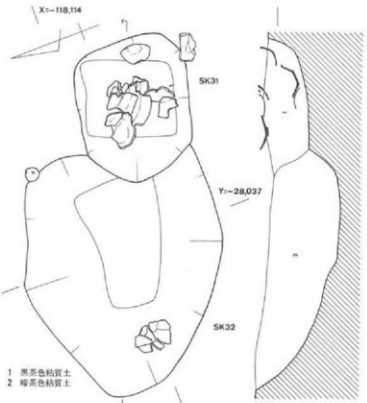
東辺拡張後のSH23-Bは、現状で東西約4mを測る。住居の南北幅および南辺は、壁溝が北西角から南に3.2mの地点で撹乱により収束しているため判然としなかった。住居埋土は検出面から厚さ0.1m程度残存していた。埋土からは陶邑編年TK208型式に並行する須恵器杯蓋が出土しており、住居の時期は5世紀後半と考えられる。他には貯蔵穴SK31から古墳時代中期の土師器、須恵器や滑石製の臼玉などが一括して出土している。

竪穴住居SH24（第42図）　調査地南西部のSH23南隣で住居北東隅の壁溝のみが検出されたもので、現状から方形住居であるものと思われる。この遺構は、検出された範囲が限られている上に、中世の遺構により削平をうけているため詳細は明らかでない。しかし、調査地壁断面での土層堆積状況やSH23との位置関係、および溝の振れ角などから当遺構を竪穴住居と認識することができた。壁溝は幅約0.15～0.2m、深さ約0.1mを測る。溝埋土からは土師器、須恵器片が数点出土しているが、いずれも細片のため時期を特定するには至らなかった。

竪穴住居SH25（第42図）　調査地南西部に位置する方形の竪穴住居で、住居南半をSH23に切られた状態で検出された。今回は住居北東部分の壁溝のみが確認され、その振れ角は西で北に30°を測る。壁溝の規模は幅約0.15m、深さ約0.1m。断面V字形を呈し、溝底には部分的に杭を打ちこんだような落ち込みが見られた。住居埋土はSH23と交錯しない部分で0.1m程度残存しており、貼床の痕跡も認められた。住居からは、土師器片が僅かに出土しているが、いずれも細片で時期を特定できるような遺物は確認されなかった。

4　出土遺物

今回の調査では整理用コンテナ10箱分の遺物が出土した。出土遺物には、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代のものがあり、その大半が遺構に伴って出土した。以下、図示できたものについて遺構別に遺物の概要を説明する。

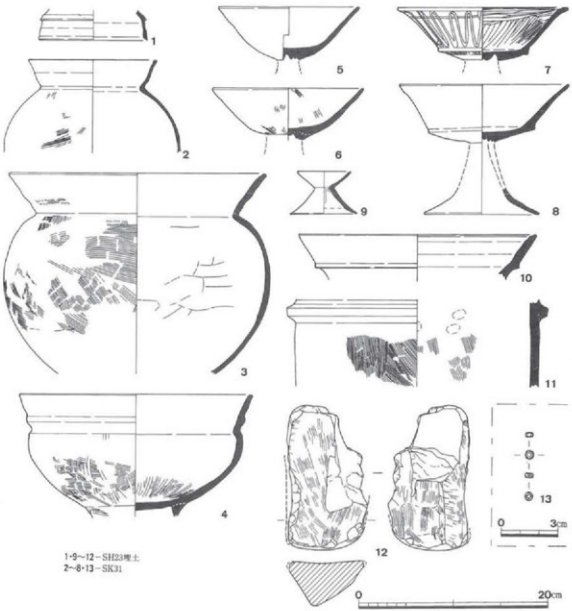


第47図　貯蔵穴SK31・32実測図（1/20）

竪穴住居ＳＨ23、貯蔵穴ＳＫ31出土遺物（第48図１～13）　土器には土師器の甕・台付鉢・高杯・器台、須恵器の杯蓋・甕がある。さらに円筒埴輪片、砥石、臼玉が出土している。このうち１・９～12は住居埋土より、その他は貯蔵穴SK31より出土したものである。

土師器の甕（２・３）の２は口径13.7cm、残存高9.85cmを測る口縁から体部にかけての破片である。形態的には「く」の字に屈曲する頸部からやや開きながら立ち上がる口縁部に、内面を肥厚させ丸くおさめる口縁端部をもつ。口縁部はナデ、体部外面は細かなハケメ調整。内面はケズリが施され厚さ２㎜程度まで薄く仕上げられている。色調は外面淡褐色、内面灰褐色を呈し、長石や赤色粒子を多く含む。また外面には煤が付着している。古墳時代前期布留式段階の特徴を色濃く残す遺物である。３は口径27.6cm、残存高21.25cmを測る、残存率1/2の破片である。口縁部が２に比べ外傾することが特徴である。色調は淡黄褐色で、石英、長石を多く含む。

台付鉢（４）は強いナデによりいわゆる二重口縁を作り出した鉢に、若干欠損しているが短い



第48図　竪穴住居 SH23、貯蔵穴 SK31出土遺物実測図（1/2・1/4）

高台がつくものである。口径24.9cm、残存高13.2cmを測る。体部上半は横方向のハケ、下半はタテハケ後ミガキを施す。脚は鉢形成後に貼り付けたものである。内外面ともに淡赤褐色を呈する。

高杯には、杯部が丸く立ち上がるもの（５・６）と、杯底部から大きく「く」の字に屈曲し、外反する口縁部をもつもの（７・８）がある。前者はいずれも石英、長石粒を多く含んだ粗い胎土で作られている。剝離が激しいため詳細はわからないが、６は外面ハケメ調整を施す。後者のうち７は杯部完形で、口径18.2cmである。杯部下半に粘土貼り付けによる稜を有し、稜を境に上はナデ後縦方向のミガキが、下はナデ後ハケメ調整が丁寧に施されている。胎土は精良。

器台（９）は器高4.6cmの小型品で、ほぼ完形。摩滅が激しく調整手法などは明瞭でないが、赤色粒子を含む精良な胎土で、淡赤褐色に焼き上げられている。

須恵器の杯蓋（１）は口縁1/12程度の小片で、住居埋土より出土した。調整はすべて時計回りの回転を用いて施され、色調は淡青灰色を呈する。土器の特徴より陶邑編年の TK208型式並行期に比定されることから、住居の埋没時期を判断をする上で重要な遺物と言えるだろう。

甕（10）は、いわゆる二重口縁甕の口縁部破片で、口径25.4cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整で、頸部外面には自然釉が付着している。１と同時期の遺物であると考えられる。

円筒埴輪（11）は同様の破片が10点あまり出土しているが、口縁部の形態がわかるものはなかった。体部の径は25cm前後を測る。外面の調整は、一次調整のナナメハケの後、二次調整として部分的にタテハケが施されている。これらは淡黄褐色を呈する土師質に焼成されている。

砥石（12）は黄白色の砂岩製で、３面すべてを研磨している。長辺15.3cm。

白玉（13）は滑石を素材としており、直径４㎜、厚さ2.5㎜である。中心には２㎜程の穿孔が施されている。

掘立柱建物ＳＢ07出土遺物（第49図14～23）　須恵器の杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺・墨書土器・平瓶、土師器の高杯、鉄製品、瓦などが出土した。

須恵器杯Ｂ（14）はＰ６の柱抜き取り時の埋土より出土した。底部のみの破片で、高台径10.6cm。内外面ヨコナデ調整で、高台貼付位置などの特徴から奈良時代に比定できるものである。

杯Ｂ蓋（16～18）の17はＰ６抜き取り埋土、16・18はＰ９掘形より出土した。口径14.2～15.6cm。平坦な天井部から口縁端部を下方へ垂直に折り曲げることを特徴とする。胎土は長石、石英の微粒を含むもので精良。17はやや焼きが甘く断面淡褐色を呈するが、他は焼成良好。

甕口縁部（15）はＰ８掘形出土。緩やかに外反する口縁部と、広い平坦面をもつ端部からなる。また口縁部外面には貼付突帯を１条巡らしている。内外面ともに自然釉が密に付着している。

墨書土器（19）は、須恵器杯の底部外面と思われる破片に、筆の運びから「三」と判読できる文字が記されている。

平瓶（20）は肩部のみの破片で、平坦な肩部からほぼ直角に折れ曲がり体部へと移行する。境界にはやや肥厚した稜が形成されている。最大径19.6cmを測る。外面には精緻なケズリが施され、自然釉が付着している。稜の形態から奈良時代の所産であると考えられる。

土師器の高杯（21）はＰ12出土の脚裾部片であり径17.5cmを測る。端部は面を持たず、丸くお

さめられている。内面ナデ調整、外面は摩滅が激しく不明。特徴から古墳時代の遺物と思われ、混入品であると考えられる。

丸瓦（23）はＰ４出土で、内外面ともに黒灰色に上きあがっている。内面には布目圧痕を残し、外面は縄目タタキを施している。

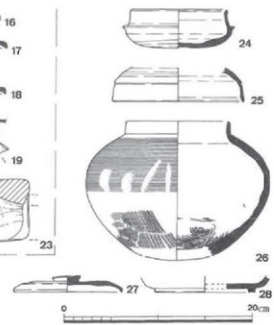
鉄製品（22）は断面方形をなす棒状の遺物で、性格はわからない。Ｐ５より出土。長さ6.8cm。

その他の遺構出土遺物（第50図24～28）

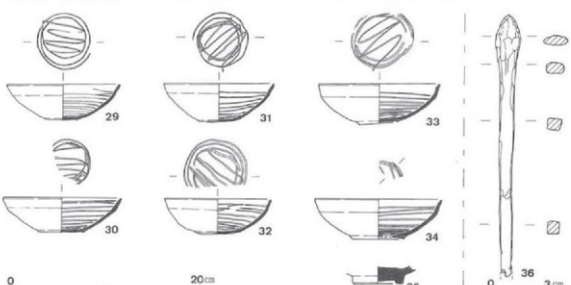
24は落ち込み状遺構 SX28出土の須恵器杯身である。残存率1/2の良好な破片で、口径10.4cm、器高4.1cmを測る。陶邑編年の TK208型式並行期に比定されるものである。

25は柱穴Ｐ41から出土した須恵器杯蓋で、口径14.5cm、残存高2.7cm。径の大型化が著しい時

第49図　掘立柱建物 SB07出土遺物実測図（1/4）



第50図　その他の遺構出土遺物実測図（1/4）



第51図　土壙墓 SX09出土遺物実測図（1/2・1/4）

期の遺物で、なおかつ稜が比較的明瞭に残存することから、陶邑編年のMT15型式並行期に属するものと考えられる。

26は土坑SK05出土の須恵器短頸壺である。口径11cm、残存高14.25cm。下半は成形時の擬格子タタキ目と同心円状のあて具痕を残す。上半は精緻なヨコナデ調整の後、外面にはカキメが施されている。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が認められる。

27は須恵器杯Ｂ蓋で落ち込み状遺構SX30より出土した。口径11.7cm、器高1.8cm。色調は外面が暗紫灰色、内面は淡灰色で、焼成は良好。扁平なつまみを有する。

28は柱穴Ｐ86出土の須恵器杯Ｂの底部片であり、底径10.6cmを測る。奈良時代に比定される。

土壙墓ＳＸ09出土遺物（第51図29～36）　この遺構からは瓦器椀、青磁碗、鉄鏃が出土した。

瓦器椀（29～34）　口縁部径11.45～13.6cm、器高3.65～4.35cmを測り、底部には径３～４cmの不明瞭な高台が貼り付けられている。内面は、口縁部には螺旋状のヘラミガキが施され、底部には鋸歯状の暗文が認められる。また外面にヘラミガキなどは施されない。形態的な特徴から、これらは鎌倉時代後半のものと考えられる。

青磁碗底部（35）　掘形北東部分の床面より出土した輸入青磁で、底径5.45cm。淡緑色の釉が施され、削り出しの高台を有する。

鉄鏃（36）　掘形南東部分の床面より出土した。鏃身長2.5cm、鏃身幅1.3cm、篦被部長5.5cm、茎部長5.9cmを測る。錆のため判然としないが、片面にのみ鏑を持つものと思われる。

包含層出土遺物（第52図37～47）　調査地内で確認した遺物包含層は２層あるが、主に明茶褐色土（第４層）からまとまって出土している。図化できた遺物には、古墳時代の須恵器杯身・杯蓋・高杯、土師器甕・甑、管玉、奈良時代の須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋、鎌倉時代の瓦器椀がある。

須恵器杯蓋（37）　口径14.5cm、器高4.6cmを測る。焼成が非常に甘く白灰色を呈する。内外面ヨコナデ調整、天井部には粗いヘラケズリが施されている。また天頂部には平行タタキ板の圧痕が認められる。陶邑編年TK10型式並行期のものと考えられる。

杯身（38・39）　38は口縁部1/2が残存する破片で、口径13.7cm、器高5.1cmを測る。時計回りの回転を利用し、内外面ヨコナデ、天井部ヘラケズリで調整されている。焼成は良好で青灰色を呈する。39は非常に焼きが甘く淡灰白色を呈する。口径14.2cm、器高3.75cm。いずれも陶邑編年のTK10型式並行期に比定される。

高杯脚部片（41）は、現状から長方形の透かしが三方に穿たれていたことが推定される。底径10.5cm、残存高6.4cm。調整手法は内外面ヨコナデの後、外面にはカキメが施されている。

土師器甕（42）は口縁部から体部にかけての破片で、口径19cm。内面に肥厚する口縁端部と「く」の字に屈曲する頸部を持つもので、口縁部はナデ調整、体部は外面が粗いハケメ、内面ケズリで仕上げられている。

甑（43）は摩滅が激しいが外面に縦方向のハケメが認められる。口径20.8cm。

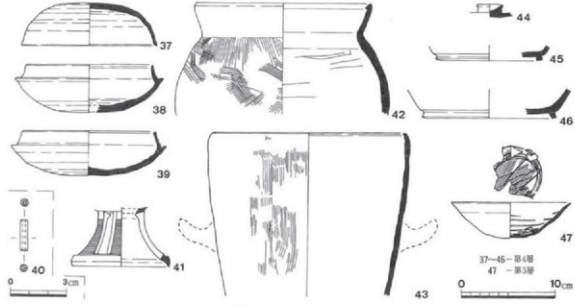
管玉（40）は淡緑灰色の碧玉製で、直径４mm、長さ1.7cmを測り、中心には径２mmの穴が穿たれている。穴の幅はほぼ中央で狭まっており、二方向から穿たれたものと思われる。

杯B蓋（44）はつまみのみで、つまみの径は2.8cm。器高1.4cm。

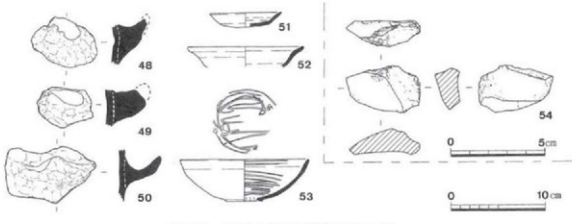
杯B（45・46）　45は底径11.5cmの中型品、46は底径14.4cmを測る大型品である。46の胎土には黒色粒子が非常に多く含まれる特徴がある。

瓦器椀（47）は明灰褐色土（第３層）出土の遺物で、口径12.7cm、器高3.8cm。内面調整はハケの後ヨコナデ。その後口縁部には螺旋状のヘラミガキ、底部の見込み部分は鋸歯状の暗文が施されている。鎌倉時代終末期頃の所産であると考えられる。

盛土出土遺物（第53図48～54）　盛土からは古墳時代～近・現代にわたる様々な時期の遺物が出土した。主な遺物には、古墳時代の鉄把手（48～50）、鎌倉時代の瓦器椀（53）、江戸時代の土師器皿（51・52）、石器剝片（54）などがある。そのうち53の瓦器椀は口径13.8cmを測り、底部には直径4.4cmの不明瞭な高台が貼り付けられている。内面調整は、口縁部には螺旋状のヘラミガキが、底部の見込み部分には鋸歯状の暗文が施されている。外面は口縁部のみナデ調整、他は未調整である。54はチャートの剝片で、長さ3.9cm、幅2.5cm。



第52図　包含層出土遺物実測図（1/2・1/4）



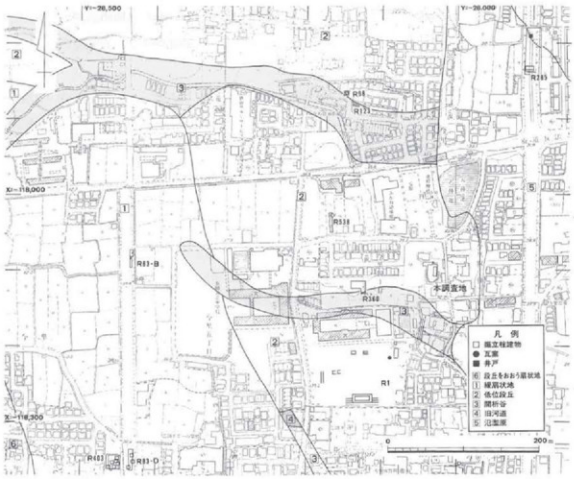
第53図　盛土出土遺物実測図（1/2・1/4）

５　ま と め

今回の調査では、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の各時期において成果を得ることができた。なかでも大型掘立柱建物SB07の位置づけは、今里周辺の地域像を考える上で問題となるだろう。

建物に関しては調査の結果、埋土からは古墳時代の遺物の混入が若干認められたものの、その他は８世紀代のものしか出土しないことから奈良時代に比定される。また真南北方向に建てられている点や、出土遺物のなかに瓦片が比較的多く含まれる点で一般集落の様相とは性格が異なるもので、何らかの官衙施設の一部になる可能性が高いものと思われる。ここで注目されるのが乙訓寺、および右京第285次調査で検出された朝廷の菜園である「乙訓園」の一部に想定される真東西棟SB28511との関連性である。まず乙訓寺は調査地の南西200ｍの地点で講堂跡などの主要伽藍の北端が検出されている。しかし第54図で示したように当地のすぐ南に谷が切り込んでおり、地形的にこれらと隔絶されていることが判明している。右京第285次調査地点に関しても当地の立地する段丘下に広がる氾濫原に立地すること、当地との間に300ｍの距離が存在することなどを踏まえ、これらとSB07との関連性は希薄であるものと思われる。

では当遺構を単独の施設と考えた場合、問題となるのはその性格である。SB07はSB28511と



第54図　周辺地域の地形区分と奈良時代の遺構検出状況（1/5000）

同じく2間×5間の建物であるが、柱間の長さ、掘形の規模、柱の太さなどあらゆる面においてSB28511より規模が大きいものであった。加えて安定した段丘上に立地するSB07はSB28511に比べ重要な施設であることが窺われる。よって当地周辺でそのような施設を求めるならば、乙訓郡衙がその候補に挙げられる。

乙訓郡衙の所在に関しては議論の分かれるところであるが、研究当初は弥生時代から中世まで有力氏族の拠点的集落が継続し、郡名を冠する乙訓寺が所在する今里遺跡が第一の候補地として考えられていた[4]。遺跡内を縦断する段丘崖の直下に当時の幹線道路である古山陰道が推定されていることも、この地に郡衙を想定する要因となっている。周辺では、右京第22・25次調査[5]では「弟国」、右京第412次調査[6]では「次官」と明記された墨書土器が出土している。しかし郡衙施設が見つかっていないため、現在では向日丘陵上の勝山中学校周辺地域が有力視されている。

郡衙は一般的に、郡庁、正倉など複数の建物が「コ」の字に配列されると考えられている。仮に当建物を郡衙の一部と想定するなら、2間×5間の細長い南北棟であるため脇殿クラスの建物と思われる。別に主殿クラスの建物が存在するならば、南と東は地形的に制約されることから、調査地の北西付近に仮定することができる。その調査地北西には現在、当地有力氏族の鎮守社を起源とする赤根神社が存在するという点で興味深く、今後の周辺での調査が期待されるところである。

今回は建物1棟と同時期の土坑群を確認したに過ぎず、これだけで郡衙と直接結びつけることは困難であり、あくまで仮定の域を脱しないが、これまでの乙訓郡衙研究に一石を投じる資料であることは明白であろう。

続いて、竪穴住居群は出土遺物から5世紀後半代のものと考えられる。近隣で同時期の遺構は未だ確認されていないが、右京第227・598次調査[7]において検出された6世紀後半代から7世紀前半の掘立柱建物群は、当地を拠点とする有力者層の居館に想定されている。よって当遺構はこれらに先行する遺構として位置づけることができ、継続的な集落展開が明らかにされた点で貴重な成果と言えるだろう。

注1）原　秀樹「右京第202次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和60年度　1987年
2）木村泰彦「右京第227次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和61年度　1988年
3）石尾政信・土橋　誠他「右京第285・310・335次調査概要」『京都府センター概報』第45冊　1991年
4）中尾秀正「第3章第3節　2　古道と村落」『長岡京市史』本文編一　1996年
5）山本輝雄「右京第22・25次調査報告書」『長岡京市センター報告書』第11集　1997年
6）原　秀樹「右京第412次調査概報」『長岡京市センター年報』平成4年度　1994年
7）小田桐　淳「右京第598次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度　2000年

第６章　長岡京跡右京第661次調査（7ANNNM-2地区）調査概要

―長岡京跡右京七条三坊十町、友岡遺跡―

１　はじめに

1　本報告は、2000年１月６日から2000年１月25日まで、京都府長岡京市友岡西山14-7ほかにおいて実施した長岡京跡右京第661次調査に関するものである。調査の詳細は、図面類の整理、出土遺物の検討などを行ったのち来年度に報告する。

2　本調査は、長岡京跡に関係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。調査は対象地に３ヵ所の調査区を設けて行った。調査総面積は99㎡であった。

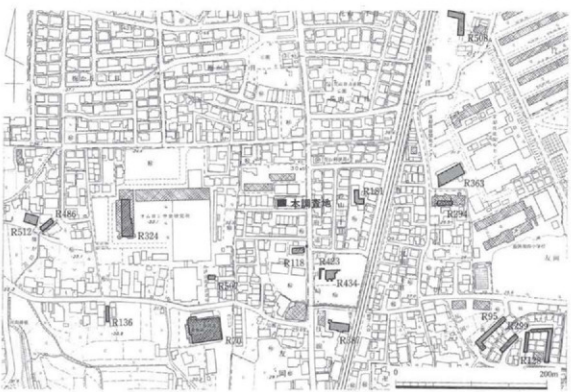
3　発掘調査は、平成11年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査員の中島皆夫が担当した。

4　発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。

5　本報告の執筆・編集は中島が行った。

２　調査概要

調査地は阪急長岡天神駅の南西約0.8kmに位置する。調査地の周辺は府道沿いにあたるため、



第55図　発掘調査地位置図（1/5000）

第56図　調査前の状況（西から）

第57図　調査風景（東から）

現在では宅地化が進みほとんど緑地が残されていない。地形的には北西から延びる低位段丘上に立地し、南東および南西方向へ緩やかに傾斜している。しかし、現況ではこのような旧地形の微妙な変化を読みとることが困難である。

調査地は長岡京跡および友岡遺跡に含まれ、南約300mには鞆岡廃寺が存在している。このなかで鞆岡廃寺は寺域などが明らかではなく、当地との直接的な関連を検討する段階にない。長岡京の条坊復原で右京七条三坊十一町にあたる当地周辺は、これまで長岡京期の遺構検出例が少なく宅地域の土地利用や性格が明らかでなかった。このため、調査では建物など宅地利用に関わる遺構の確認が期待されていた。一方の友岡遺跡は縄文時代からの営みが確認できる集落遺跡で、調査地が位置する遺跡北西部では中近世の遺構・遺物が数多く確認されており[注1]、当地でも中近世集落に関連する調査成果が得られるものと考えられていた。また、調査地は遺跡推定範囲の北西縁辺部にあたるため、友岡遺跡の広がりを検討する上でも重要な場所と言える。さらに、当地の西には伊賀寺遺跡が推定されており、右京第324次調査[2]では平安時代の掘立柱建物群が確認されている。

調査は当初残土置場の確保が困難であったことから、調査区の西半、すなわち予定面積過半の表土などを重機により除去し順次人力による掘削を開始した。その後、残土置場として充分な範囲が確保されたため、再度重機を導入し残土の除去と残されていた調査区東半の掘削を行った。なお、本調査の詳細については次年度に報告する。

注1）纐　伸一郎「右京第118次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和57年度　1983年
2）木村泰彦「右京第324次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度　1990年

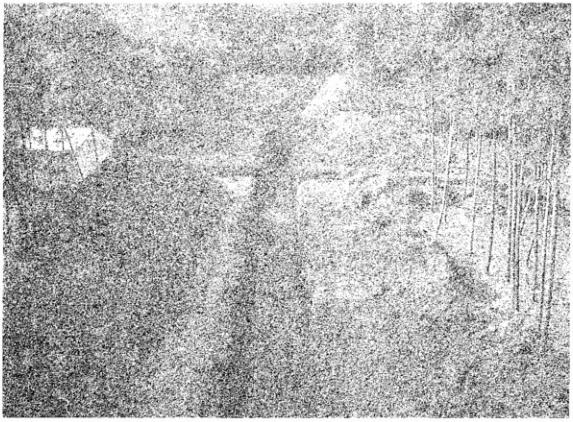
付表４　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
巻次	第41冊
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福永伸哉、清家　章、原　秀樹、小畑佳子、中島皆夫
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
発行機関	長岡京市教育委員会
所在地	〒617-0826　京都府長岡京市開田一丁目１番１号
発行年月日	2000年３月31日

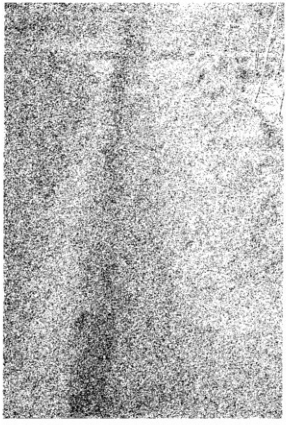
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡(右京第626次)	長岡京市 井ノ内鍛山７	26209	107	34度56分 18秒	135度40分 51秒	19981207 ～ 19990331	580㎡	遺跡確認
長岡京跡(右京第631次) 神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡	長岡京市 東神足二丁目７	26209	107 83 82 84-1	34度54分 59秒	135度40分 51秒	19990201 ～ 19990312	84㎡	遺跡確認
長岡京跡(右京第646次) 今里大塚古墳	長岡京市 天神五丁目108	26209	107 44	34度55分 36秒	135度41分 22秒	19990719 ～ 19990817	130㎡	古墳の範囲および築造方法などの確認
長岡京跡(右京第647次) 井ノ内車塚古墳	長岡京市 井ノ内向井芝４	26209	107 2	34度56分 26秒	135度41分 １秒	19990719 ～ 19990817	40㎡	古墳の範囲および築造方法などの確認
長岡京跡(右京第653次) 今里遺跡	長岡京市 今里四丁目210	26209	107 32	34度56分 ６秒	135度41分 35秒	19991004 ～ 19991126	309㎡	住宅建設
長岡京跡(右京第661次) 友岡遺跡	長岡京市 友岡西山14-7	26209	107 97	34度54分 54秒	135度41分 29秒	20000106 ～ 20000205	108㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡(右京第626次)	都城	長岡京期	溝	土師器、須恵器	
長岡京跡(右京第631次) 神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡	都城 集落 城館 城館	長岡京期 弥生、古墳時代 室町時代 室町、桃山時代	土塁、空堀	土師器、須恵器、瓦器 国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、石造物	神足城の堀を確認
長岡京跡(右京第646次) 今里大塚古墳	都城 古墳	長岡京期 古墳時代後期	墳丘面、	土師器、須恵器、埴輪	
長岡京跡(右京第647次) 井ノ内車塚古墳	都城 古墳	長岡京期 古墳時代後期	墳丘面、溝	須恵器、埴輪	墳丘規模を確定
長岡京跡(右京第653次) 今里遺跡	都城 集落	長岡京期 古墳時代 奈良時代 鎌倉時代	竪穴住居、土坑 掘立柱建物、土坑 土壙墓、溝	土師器、須恵器、石製品 土師器、須恵器、瓦 土師器、瓦器、鉄鏃	官衙施設と推定される掘立柱建物を確認
長岡京跡(右京第661次) 友岡遺跡	都城 集落	長岡京期 平安～鎌倉時代	溝 掘立柱建物	土師器、須恵器、土馬 土師器	

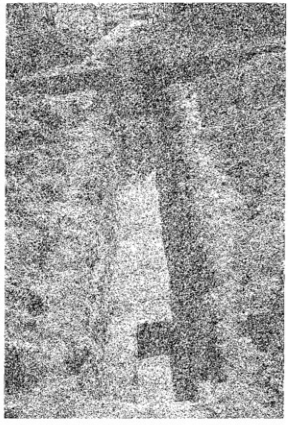
図　版



（1）　調査区東半部（東から）



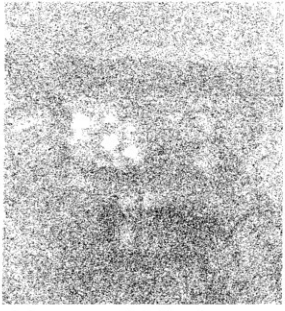
（2）　1トレンチ（東から）



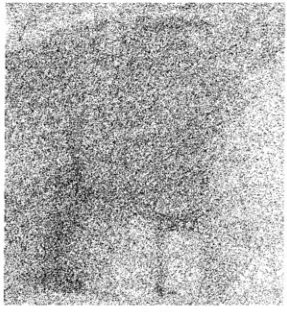
（3）　2トレンチ（北から）

図版二

（1）　3トレンチ拡張前（東から）

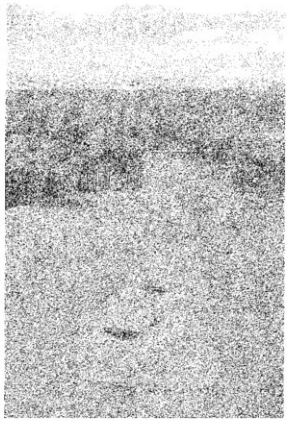


（2）　4トレンチ北壁（南から）

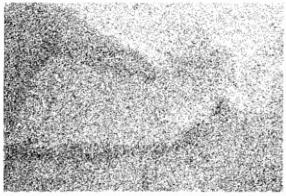


（3）　5トレンチ西壁（東から）

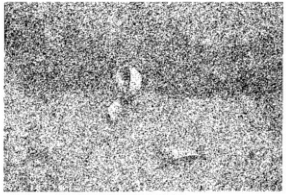
（1）　溝 SD09検出状況（西から）



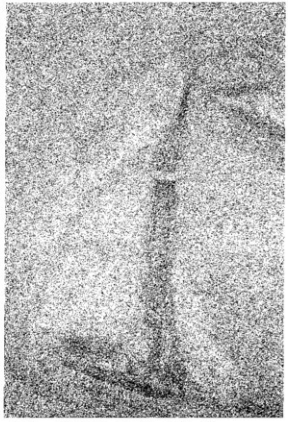
（2）　溝 SD09完掘状況（西から）



（3）　1トレンチ拡張区（南から）

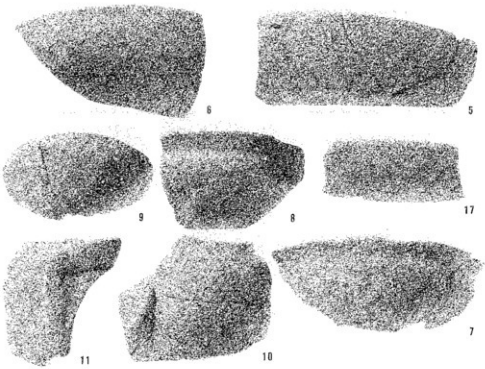


（4）　溝 SD09遺物出土状況

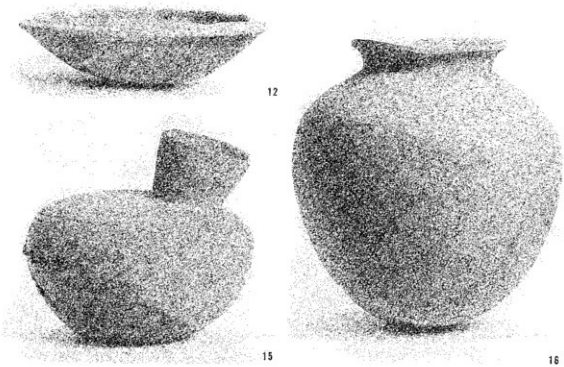


（5）　溝 SD05・06の竹（南から）

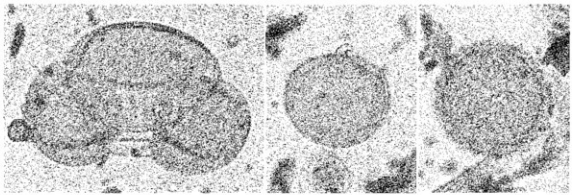
図版四



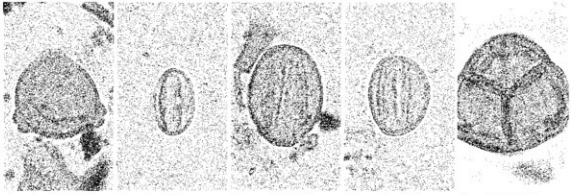
（1）　長岡京期の土師器・土製品



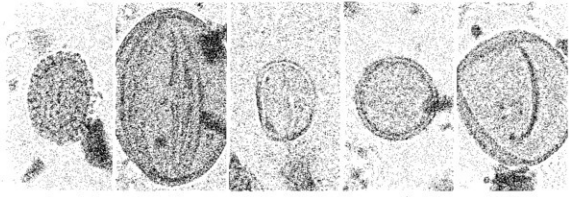
（2）　飛鳥時代の須恵器



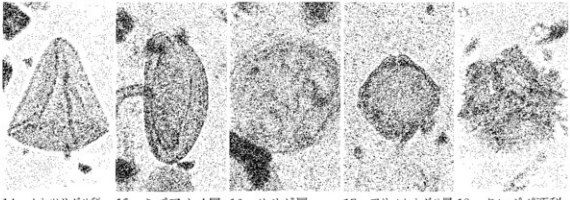
1　マツ属複維管束亜属　2　スギ　3　コウヤマキ



4　カバノキ属　5　シイ属　6　コナラ属コナラ亜属　7　コナラ属アカガシ亜属　8　ツツジ科



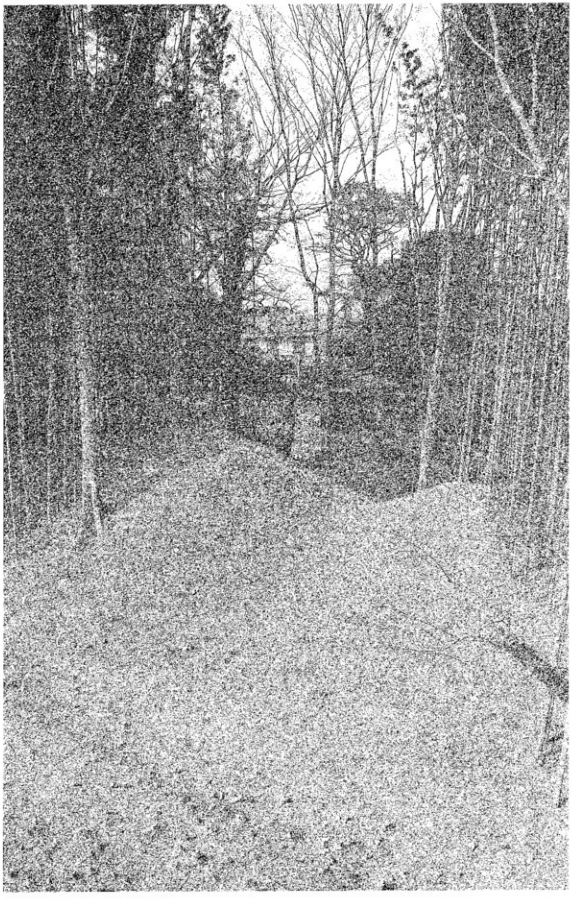
9　モチノキ属　10　カキ属　11　マメ科　12　オヨダカ属　13　イネ属型



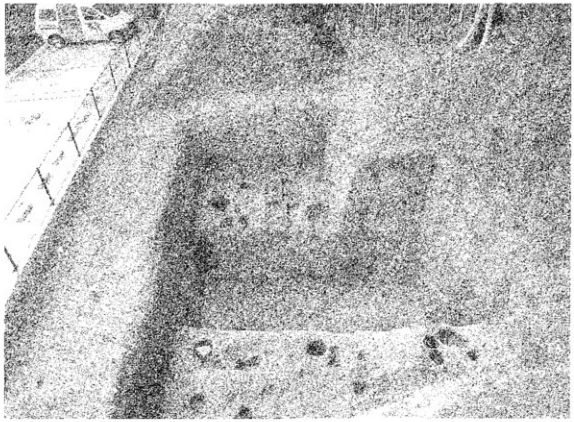
14　カヤツリグサ科　15　ミズアオイ属　16　ササゲ属　17　アリノトウグサ属フサモ属　18　タンポポ亜科

花粉の顕微鏡写真

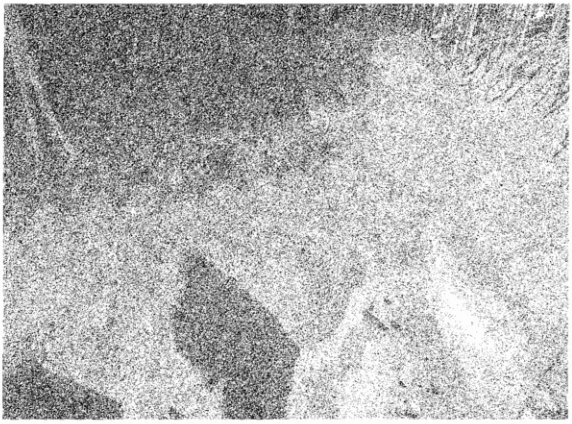
図版六



勝龍寺城の土塁（南東から）

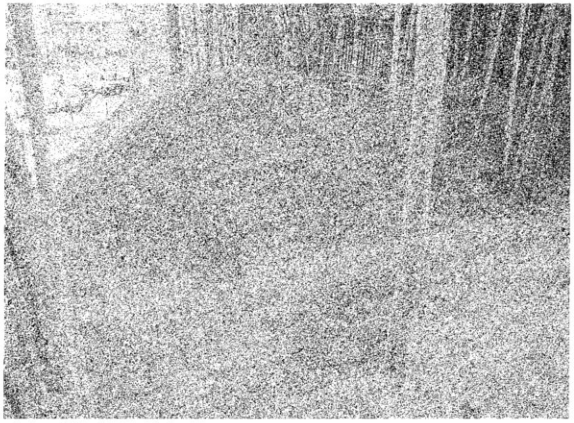


（1）　1トレンチ全景（東から）

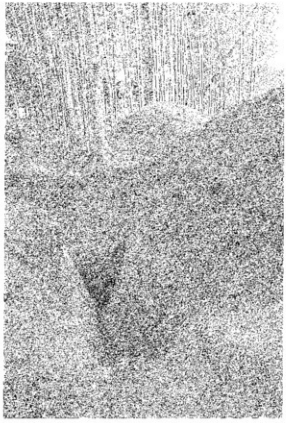


（2）　1トレンチ堀SD01断面（南から）

図版八

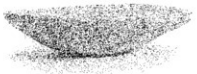


（1）　土塁と空堀跡（北東から）



（2）　2トレンチ空堀（西から）

（3）　2トレンチ空堀（北から）


6

7

8

9

10

12

14

17

18

34

35

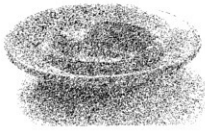
37

38

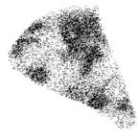
39

40

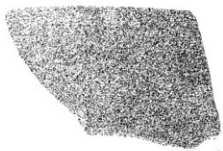
47


33

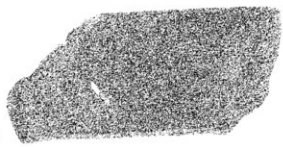
図版一〇



48

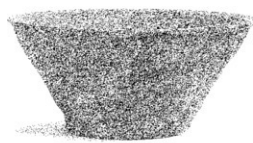


28



49

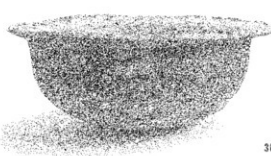
22



21

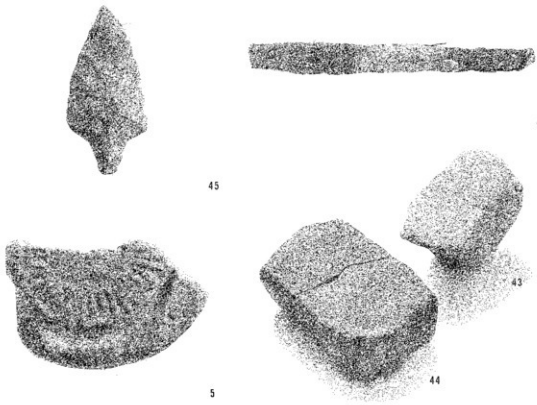
23

32

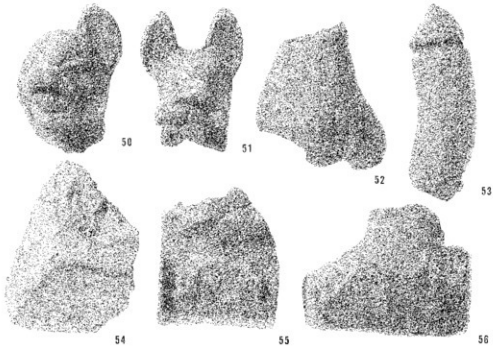


30

土師器・瓦器・陶器・輸入磁器



（1）　石器・石製品・金属製品・瓦



（2）　狐の土製品

（１）　墳丘全景－１（東から）

（２）　墳丘全景－２（南西から）

図版一三

（1）　第1主体トレンチ全景（北から）

（2）　墳丘盛土内の盛土（西から）

（3）　トレンチ中北部の盛土（西から）

図版一四

（１）　墳丘西トレンチ全景（西から）

（２）　墳丘西トレンチ（西から）

（３）　トレンチ中央墳丘断面（北から）

(一)　後円部北トレンチ全景（北から）

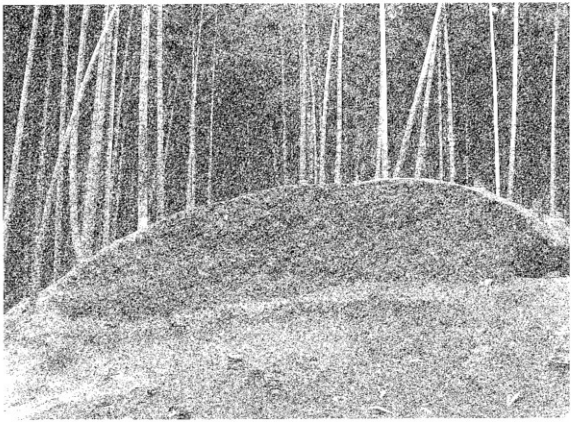
(二)　後円部北トレンチ全景（北から）

図版一六

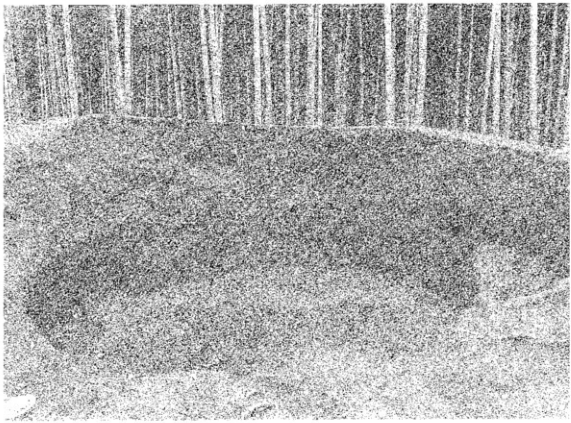
（1）　後円部墳丘トレンチ全景（南から）

（2）　後円部墳頂土壙断面（西から）

（3）　墳丘盛土土器出

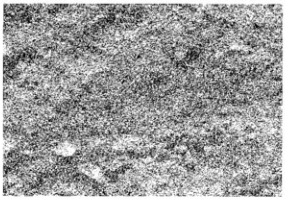


（1）　後円部撹乱部調査区（南から）



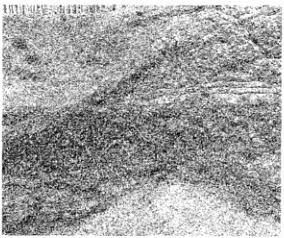
（2）　前方部撹乱部調査区（西から）

図版一八



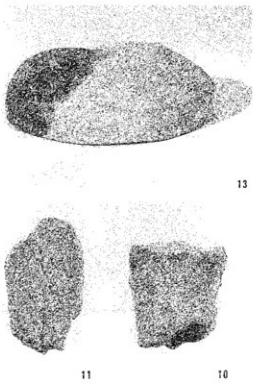
（１）　後円部撹乱部調査区土嚢状遺構

（２）　後円部撹乱部調査区土嚢状遺構

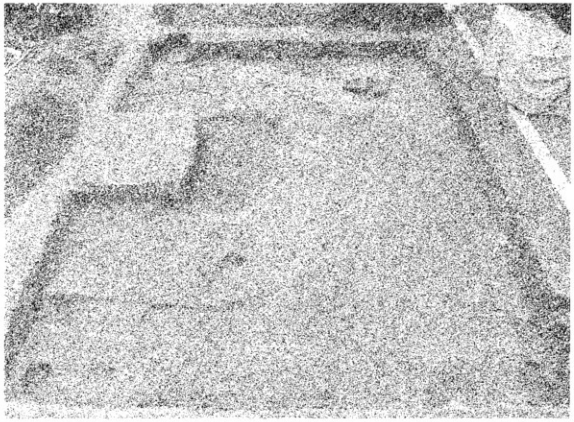


（３）　前方部撹乱部調査区東隅

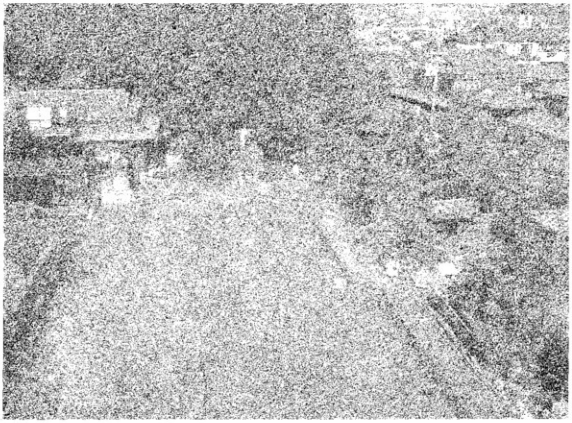
（４）　前方部撹乱部調査区南東部



（５）　出土遺物（番号は第37図・38図に対応）

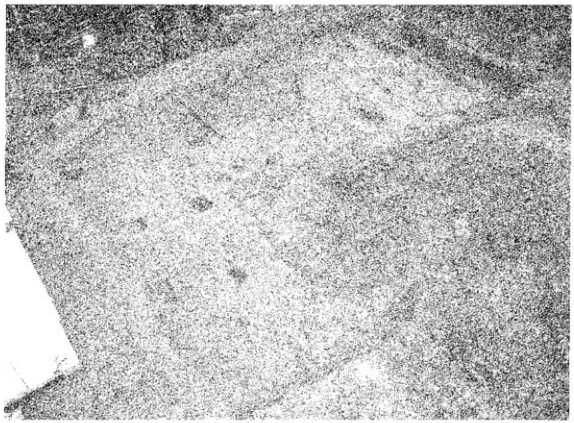


（1）　調査地全景―1（北から）

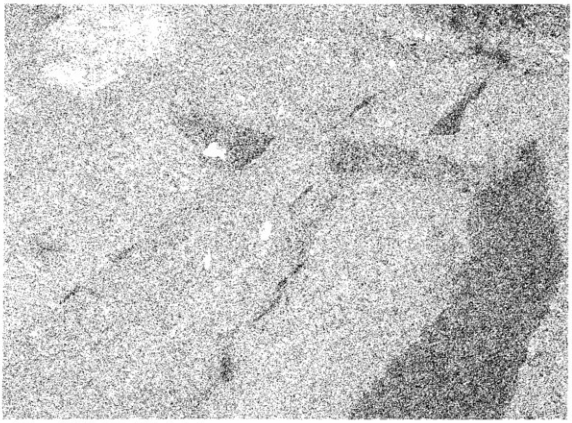


（2）　調査地全景―2（南から）

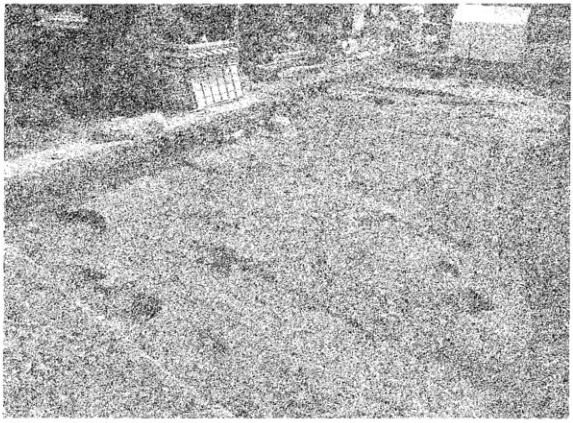
図版二〇



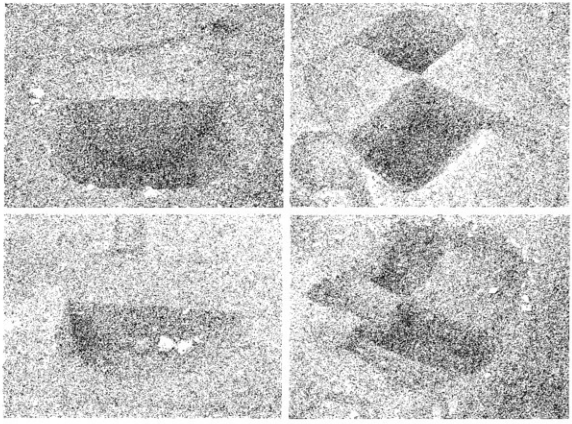
（1）　調査地全景－3（南東から）



（2）　土壙墓SX09（南西から）



（1）　掘立柱建物 SB07（北西から）

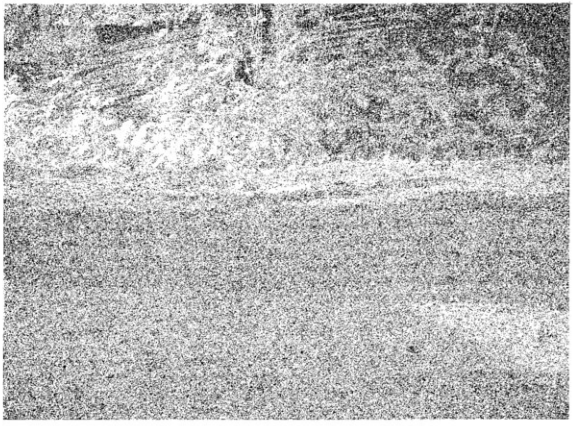


（2）　掘立柱建物 SB07柱穴（1－P 4、2－P 5、3－P 7、4－P 8）

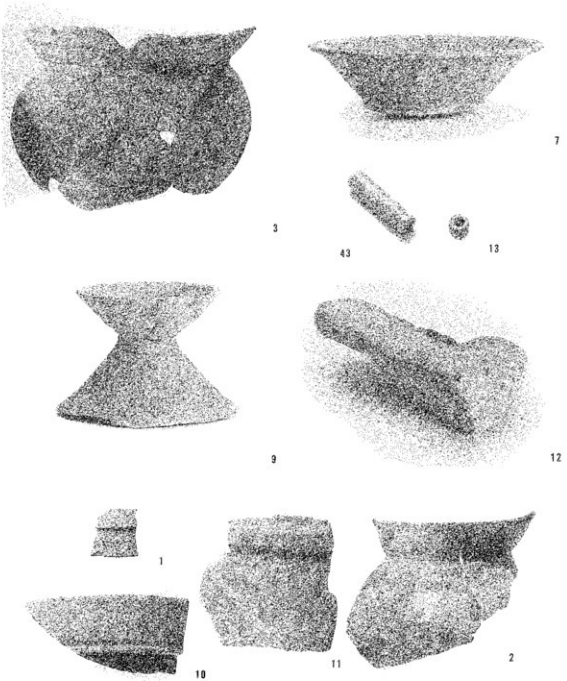
図版二二

（1）　竪穴住居（南東から）

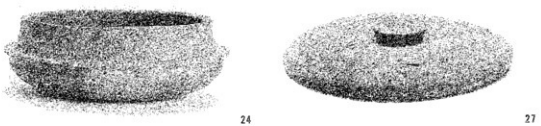
（2）　貯蔵穴 SK31・32（東から）



（3）　土層堆積状況（東から）

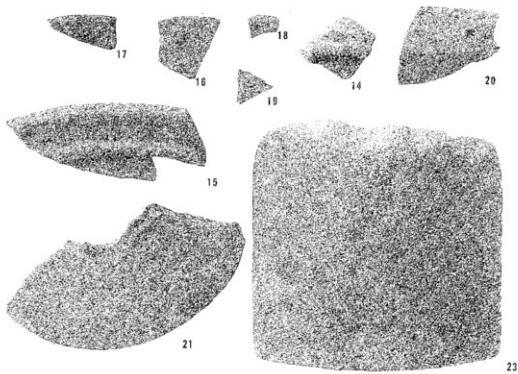


（1）　竪穴住居 SH23、貯蔵穴 SK31出土遺物

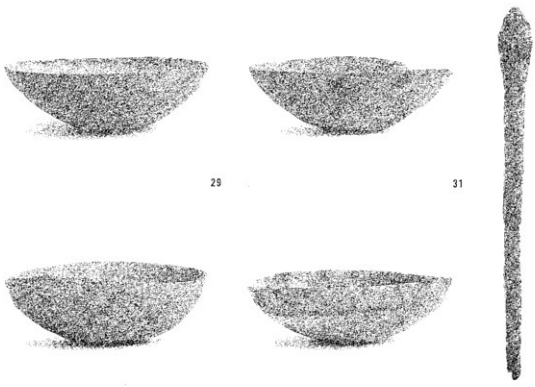


（2）　出土遺物

図版二四



（1）　掘立柱建物 SB07出土遺物



（2）　土壙墓 SX09出土遺物

長岡京市文化財調査報告書　第41冊

平成12(2000)年３月24日　印刷

平成12(2000)年３月31日　発行

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１

電　話　075-955-3622(代)　FAX 075-951-0427

発　行　長岡京市教育委員会

〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目１番１号

電　話　075-951-2121(代)　FAX 075-951-8400

印　刷　㈲システムサービス

〒603-8341

京都市北区小松原北町105

電　話　075-465-4829　FAX 075-465-4828